大正二年度

一粒の種子

父兄保證人並びに來賓諸君今日は本校第十回、附屬高等女學校第十二回、同豊明小學校第二回の卒業式を――殊に今年は森村翁が數年前本校の教育部を設立して我が國教育の改善に貢献せんことを希望せられたる其の教育部の無試驗檢定の資格を與へられたる第一回の結果を――諸君の前に將た我々の信ずる祭壇に捧ぐるの日に於きまして、この御來會の榮を賜はり、且森村翁、大隈伯並びに永く本校に於て學生を御訓育になつた文部大臣奥田博士の祝辭を忝ふすることは我々一同深く光榮と致す處であります。

茲に卒業生諸子は、櫻花と雪花と相混じて降るの時候に際し、喜びの涙と憂ひの涙と交々かゝるの感を以て、種となり實となりて今、卒業の價値を顯はさるゝといふ事は我々の又深く喜ぶ所であります。謹んで顧みれば、本學年の第一期、初夏六月に於きましては畏くも　皇太子妃殿下大正の御代の　皇后陛下の本校に行啓の榮を賜はり、諸子はこの講堂に於て御前講演の榮を得られ、我々一同は評議員森村翁の如き高齢なる御方を初め、下は幼稚園兒に至る迄この光榮を受けて感泣措く處を知らず歡び勇みたちましたが、越えて七月未だその嬉し涙の乾かざるに突如として黒雲漲り、愁風襲うて我等六千萬の同胞は國父陛下の御不例の悲報に接し、驚愕慟哭し爲に炎天の夏も嚴寒の寒さを感ずるの時に遭遇致しました。之に加ふるに隣邦には革命起り、其の他歐洲の戰亂及びメキシコの騒亂等内外に激變の多い年でありました。此等の激甚なる變化、刺戟は本學年の學生にとりては内に益々其の印象を深くし、外に益々其の反動を強めたものであります。然るに天は未だ之を以て足れりとせず、更に第三學期に於きましては諸子の舊恩師相踵いで長逝せられ、頻々として人生の複雜なる變化に遇ひ、刺戟に接したのであります。此等の境遇は天の意、果して奈邊に在るかを思はしめ、益々人生の根本問題を考へざるを得なかつたのであります。

本年の卒業生は過去一年間に於て將さに斯くの如き大刺戟、大變化の境遇を經て、内に種々なる感動を受けざるを得なかつたのであります。この内なる感動は外に如何なる特色を發揮致すことでありませうか、これは多分卒業生諸子自身に於きましても、未來に屬するの問題となるの止むを得なかつた事でありませう。

更に換言すれば、教育上最も必要なる斯くの如き變化ある處

の刺戟は各自の反省を深くし、その感動を強くしてその校風の上に、その品性の上に、甚大なる感化を與へたるには相違ないが、本學年過去一年間の激甚なる刺戟はあまりに深きに過ぎて、其の反動をして尙茲に明らかなる形となし秩序ある働きとなして現すには未だ時が早いのであります。故に本年の卒業生の特色は未來に俟つの外ないので、この意味に於て殊に今年の卒業式は始業式であると申さなければならぬと思ひます。願くば諸子はこれより晩成の大器を期して進み、斯くして大正の國民を生み育て全うするの責任を思はなければなりませぬ。

諸子が此の責任を遂行するに當りては、急がず、徐に省み、考へ、着々と實を積んで永久の時を用ひて其の大成を期せられん事を希望するのであります。之を解りよく申すならば、諸子が過去の努力によつて贏ち得たる今日の卒業式の意味の其の內に得たる一粒の種子を今日よりお蒔きになり、明日更に新たなる一習慣を收穫れ、又更にその一粒の習慣の種子を蒔き、次ぎの翌日又その一品性を收穫れ更に其の種子を蒔いて、再び進みて完全に向ひたる人格の實を收穫れ又更に其の人格の種子を一層深い靈地に蒔いて最後に各自の運命、延いては御國の運命を收穫せんければならぬと思ふのであります。願くば此の學年に、此の學びの庭に落ちた一粒の種子は永久無限に成長發達して更に止む時なからん事を切に祈るのであります。

（「家庭週報」第二百十九號・卒業式告辭）大正二年四月

記念植樹・理想樹

今日本校の創立第十二回記念式を擧ぐるに當りまして、遠く米國より來朝せられたハーバート大學教授ピーボデー博士を初め、其の他貴顯淑女諸君の御來臨を辱ういたしました事は、深く我々の光榮とする所で御座います。本年本校に新たに入學した生徒は附屬豊明幼稚園より大學部迄全體を通じて四百九名御座います。其の中大學部及び高等女學校に入學の者が大多數を占めて居ります。これ等多數の新入生の中には今日大正の御代に於て本校の記念式に初めて列る人も澤山ありませう。其故茲に本校の記念式の意味及び記念の徵として毎年記念樹を植ゑる事に就きまして一言申して置かうと思ひます。

本校では毎年の記念日には何か特色ある樹を記念の徵として校庭に植ゑるのでありまして、本年は銀杏樹を植ゑる事になりました。新入學生諸子は更にこの式の由來又は母校が創立第一回の記念式の其の時には如何なる特色のある樹をこの學びの庭に植ゑたかと云ふ事を御聞きになり度い事と思ひます。

櫻楓樹

本校に於て最も記念すべき第一回記念式に於て此の校庭に植ゑつけた樹は實に本校の主義精神の宿つて居る櫻楓樹でありました。然らば櫻楓樹とは如何なる意味を表す樹であるかと御思ひになりませうが、私が今茲に申す櫻楓樹は、三つの特色がこの一本の樹に同化して今日迄十二年間益々勢ひよく芽を出し枝を張つて成長發達して來たのであります。今其の三つの特色を分けて云ひますならば、第一の特色は「櫻」であります。これは實に我が國日本魂の眞髓を表象した花であります。第二の特色は「楓」であります。葉櫻の美しさもあるが葉として美しいものはわが國に於て秋の紅葉に及ぶものは御座いません。實にわが國の楓の紅葉した其の色ほど美を發揮したものはない、櫻楓樹とは卽ち櫻の花の朝日に匂ふ其の心にもみぢばの美しき色を加へ且之に第三の特色を加へたもので三特色が集つて一本の櫻楓樹となつたのであります。卽ち其の意味は我が國特有の大和魂の誠と、眞に發揮せられたる我が國の美德とを合せたる其の樹に更に立派なる行を實らせると云ふ事であります。卽ち眞善美を表徵したる理想樹たるに外ならぬのであります。

斯くの如く本校の創立第一回の記念式に於ける記念植樹は本校の精神を植ゑ付けたものでありまして、卽ち我が國獨特の櫻の精に我が國固有の婦德の美をそへ、而もこれに西洋の最も優れたる櫻の實を加味したる如き最も同化の理想を表徵したものであります。次ぎにこの樹は又三つに別れたる大いなる根をはりて深く向上の靈地に根を下し、幹よりも亦大なる三つの枝を分ちてこの樹の發達の道を示して居ります。この向上の地に於ける三大根の一は廣く世界的潮流の泉で、之より出づる枝は道德、宗教、文學、教育、社會、家庭の有らゆる方面、卽ちインターナシヨナル・ムーブメント、インターナシヨナル・モラリチー、インターナシヨナル・リヽジヨン、インターナシヨナル・コミニチー、インターナシヨナル・ソサイチー等の枝に別れて居ります。實に此の根は本校の校風を養ひ育てるに樞要なる根源で、今日迄十二年間成長發達した精神の根本であります。然るに茲に又この主義精神と同一根柢を以て生れたものがある。卽ち其れは歸一協會の發芽であります。この主義精神は我が日本女子大學校のそれと相合致し同根柢であることは、昨年來屢々發表せられたるに依つて皆さんはよく御承知の事であらうと思ひますから、再び說明することを止めますが、かの理想樹の三大根の一なる世界的潮流と云ふは卽ち歸一協會の發芽とその同根柢にある事を更に思ふのであります。

本校の精神教育の根本を養うて居る泉には、遠く廿年前に於て我々が米國から汲み來つた流れも、或は二千年來我が東洋を流れて居る思潮も凡て一つとなつてこの根本に注ぎ集つて居るのであります。斯くの如くおもひ來れば今日の女子大學あること、並びに茲に相會するこの機會が誠に不可思議なる感じがいたします。即ち一方にはわが女子大學と同根柢に立ちたる歸一協會が、世界的に成立し發表せられて、その第一回の交通として米國に於ける同協會の代表者ビーボデー博士を迎へ、時恰もこの記念式上に於て博士の講演を聽くといふ事は偶然にして偶然に非ざるかの如き感じが起ります。其の他頃日私が歐米漫遊の際米國に於て歸一協會運動の發表の際に非常なる賛助を與へられた方々や、且女子大學發起人である大隈伯爵にも共に御臨席を願つて、一場の講演をうかゞひ得ると云ふことは誠に深い關係が今日の會合をもたらした事を思はざるを得ません。茲に來賓諸君に感謝の意を表し併せて遙々來朝せられたるビーボデー博士の紹介の辭に代へます。

（「家庭週報」第二百二十號・第十二回記念式に於ける講演）　大正二年四月

外遊餘談

歐米では學校と言つても單に學校其者に限らずに、廣く社會全體を悉く皆學校と看做して居る。社會の事國家の事を議するにも皆大學が中心であつて、それ等の大問題は皆大學で研究することになつて居る。大學と社會とは常に共同接觸してゐて教師は只教場に於てのみでなく、廣く社會の先生といふことになつてゐるのである。日本あたりでは小學校で譬へば生徒に植物學を教へるにしても只机の上で是は何であるかと質問をし或は説明して教へて居るのであるが、彼地ではそれと違ひ各自に材料を與へて各自に觀察させるやうな教授法である。大學では總て歴史にしても其他何でも皆整然と分類がしてあつて、生徒は勝手に入つて勝手に調べられるやうにしてある。博物館なども矢張りさういふ設備になつてゐて人民は自由にそこへ行つて研究することが出來るやうになつて居る。博物館では殊に最も完備してゐるのは獨逸のミュンヘンに在るのであつて、譬へば鳥の標本にしても卵から一番進んだところまでのが誠に良く拵へてあつて、一見發達の順序を知るに足り、其他各種の器械のやうなものまで悉く備へ付けてあつて、一般の人々は皆勝手にそれを動かして見たりして研究することが出來るやうにしてある。地質學に關するものでも天文學に關するものでも矢張りさうで、目で見手でやつて見て直接頭腦に入るやうに都合良く出

來て居る。出版事業などに就ても博物館へさへ行つて見れば、活字のことから印刷のことからそれに關する總てのことを一目して知ることが出來る。圖書館には殊に意を用ゐてあつて其設備の完全して居ることは驚くの外ない。從つて其建物も實に立派で、亞米利加邊には蠟石などで出來て居るものもある。書物の出し入れに就ても今迄とは違ひ、努めて時を省くやうにされてある。そして圖書館に電車や汽車があるのも珍しくない。要するに學生は皆自分々々に研究するといふ事に重きを置いて居る。英國などに行つて見て適切に感ずることは、教師は所謂教師でなくして、寧ろ學生の友人である。そして多くの學生に一樣の教授をするのではなくして、一人々々の其性格に應じて適當の教授を爲しつゝある。で、時には教師と教師學生と學生の間に於て互に人格の修養をすることにもなる。大學以下の各學校でも大事なことは多く其家庭に於て修められ、從つて學校と家庭との連絡といふものが密接に保たれて居る。獨逸あたりの高等女學校などでは、生徒の歸る時間には其お母さんが自身に態々迎へに來る。採點の方法などに就ても日本では其大部分は學校に於ての成績によつて決めるのであるが、彼方では學校以外に家庭に於ける行動にも重きを置き、それによつて採點の標準に大關係を持たせてある。

（「婦女新聞」第六百七十二號）大正二年四月

歐米旅行報告

私は昨年歸一協會を代表して歐米に出かけ、如何なる方針を以て此の歸一協會を各國に紹介したかといふことを一寸申上げます。

私は一體教育の視察の爲に出かけたのであるが、其の主なる目的に加へて、別に此の歸一協會の趣意を紹介し、且西洋諸國の人々は此の運動に就いて如何なる態度を執るか、その思想界は何う傾いてゐるか、其の眞相を充分見て來るやうにといふ諸君の御注意があつたから、私も今度彼の地を廻る間に、聊か其の爲に微力を盡したのである。出立する前に、充分諸君と御打合せをする事は出來なかつたけれども、前からの方針によつて、歸一協會の主義趣意等から、如何なる程度に於て着手すべきか、諸君のお考は大體私も了解して居つた積りである。それで其の範圍を越えないやうに注意をした。彼の地に在る間は時々是非諸君と御相談したい事もあつたけれども、遠方で及ばないことであり、又さうして居つては時機を失ふこともあり、私だけの考でその時々に適宜の處置をしたのであつたが、歸つ

て見て諸君が私の取つた方法、私の彼の地に於ける行動を能く了解して下されたことは、私の大いに喜ばしく感ずる所である。歸一協會員としての外に私個人としての意見も同時に發表したのであるが、其の私個人の考と、歸一協會を代表して申した言葉とは明らかに區別を立てゝ、これが混同しないやうに注意して置いた。又歸一協會の成立ちや實力に就いて、餘り彼の地の人に買ひ被らせないやうに、或は基督教に關係ある會でもあるかの如き誤解を來さない樣に、總て事を明瞭に敍して、それで反對なら反對で宜しい、其の反對の意見を聞かう、一は研究の目的で行つたのであるから其の邊の事に就いては充分に注意をして、公平な態度を以て此の方の意見を提出したのである。併し何分にも非常に時日が無かつたので誤解はせしめないまでも、少くとも眞相が徹底しない處れが澤山あつた。私は夜は汽車にて、晝は自動車にて驅け廻るといふやうな譯で、特に英國ではクリスマス前後の休暇で人が居らぬから格別に忙しかつた。例へばサー・オリヴアー・ロッヂ博士の處に行つたのは夜九時過ぎであつて突然逢つて其の話を出した。奧さんは食事の用意をしたからといふことであつたが、それも斷つて驅け出した。それからリード大學の總長サドラール博士を訪ねた時などは、丁度クリスマスの朝であつて、八時前に行つて面會を求めた處が、博士は其の朝も會に出かけるといふやうな譯で非常に忙しいと見えて、先生は、貴君は英國のクリスマスの習慣を知らないかと言はれた。イヤ十分知つては居るが、私はもつと重大なことを提出するのであるから許して呉れと言ふと、兎に角食事を共にしようといふことであつたが、私は時間が三分より無いからこれだけのことを聞いて貰ひたいといつて、歸一協會の趣意を掻い摘んで話すと、分つたと云ふので、それでは之に對する貴君の意見を手紙に書いてくれといつて、飛んで歸つたといふやうな遣り方もしたのである。併し一方には又數回會見を重ねて始めて署名した人も少くない。それから紐育で愈々アメリカに歸一協會を設立するといふ最後の會のあつた時なども、マサチユセツツやシカゴ近邊の、所謂中部地方の人達をも、其の準備委員に加へなければならぬ筈であつたが、其處等へ相談する暇がなかつたので、色々と考へた末にエリオツト博士や、バトラ博士其の他十餘名の人だけを集めて會を結ぶといふやうな、さういふ斷行もやつた。總てさういふ譯で、歸一協會の精神を徹底させることの出來なかつた處れもあり、獨斷で極めたこともあつたりしたので彼の地の人々にも其の後手紙を以て辯解しなければならぬことも澤山ある。總てこれらの事は、時日が無かつた爲に餘儀なくさうなつたのである。其の邊

の事は事情御諒察を願ひたい次第である。

もう一つ私が彼の地へ行つて、餘り歸一協會の事のみを主張したやうに感ずる人もあらうが、實は今度の視察は根本問題の視察であつて、即ち教育と宗教の動機問題に關するものであり、又歸一協會の趣意は私が以前から教育の根本主義としてゐるところと全然同一である。枝葉問題に就いては議論もあるかも知れぬが根本に就いては一である。それで今度の動機は勿論私個人の意志に存する。けれども自分の信ずるところでは、私の意見は社會の意志である。廣く云へば宇宙共通の意志から來てゐる。而して今後の日本の道德を本當に進めようとするには、今までのやうに知識を與へるのみではいかぬ、どうしても人格を進めるだけの根本的動力を盛んに振興せしめなければならぬ。これは我が國教育上又自分の修養上缺くべからざるものと信ずる。この主義は假令一人の賛成者がなくとも私は主張して見たいと思ふ。それで今度でも、私の友人が亞米利加にあるから、それ等の人々に對して、必ず此の問題を提出する積りであつた。假令歸一協會の使命がなくても充分主張する積りであつた。それであるから先づ其の人達が之に就いてどういふ意見を有つてゐるかその意見を交換してみて、賛成ならば何ういふ主義を以て賛成するか、賛成する以上は其の成立ちに就いてどれだけ貢献するのであるか、それを十分確めたいと思つたから出立する時に一の帳面を求めて、加盟する人に其の理由と署名をこれに記して貰ふことにした。

それで私の廻つた順序をかい摘んでお話をすると、先づ一番最初に布哇に寄り、それから米本土へ渡つて、私の以前から知つてゐるスタンフオード大學に行つて、ジヨルダン博士を訪ねる前に、舊知のスカツダー博士にも逢つて賛成を得たが、此の時は帳面を忘れて行つたので博士の署名を得ることが出來なかつた。其の次ぎに州立大學を訪ねたが、丁度夏休みの頃で總長が居らぬから、東洋部の部長をしてゐる人に逢つて話をした。其の人も其の計畫に同情を表して將來同盟して此の目的の爲に盡さうといふことを約束した。此の時始めて帳面に其の人の意見を記し、且署名も得た。それからロスアンゼルス邊をまはつてから、シカゴを中心として地方に出掛けた。此の前に、スカツダー博士に逢つた時に、此の席に居らるゝギユリツク博士の書簡即ち博士が昨年歸一協會設立の當時贈られた手紙を見せて、歸一協會に對するアメリカ側の反響に就いて氏の意見を徵した。然るにスカツダー博士は、私は大賛成であるが、然し亞米利加全體の眞意は未だ不明であるから、此の手紙を公にすることは問題である。恐らく面倒な問題を惹き起すかも知れぬと

いふことであつた。そこで私も、ギユリツク氏に迷惑をかけては不可と思つたから、手紙を公にすることを差控へた。而してシカゴ大學へ行つて、第一にジヤドソン總長に面會を求めて、先づ總長から始めた。總長は大變賛成だけれども、自分が卒先して發起人になるとか、他に紹介して賛成を求めるとかいふことに就いては速答は六づかしい。一つ考へさして呉れといふことであつた。それから其處に神學の教授をして居るフオスター博士、此の人は自由思想を發表した爲に問題になつて、シカゴの牧師社會が大學に迫つて之を追出す運動をした。さういふことの有つた人で、其の人へも話をすると、期せずして相一致する處があつて、早速評議員の一人になることの承諾を得た。このフオスター氏と話をして、もうアメリカ全體が餘程自由思想に傾いて居ることが分つたので、私は今後其の積りで遠慮なく話をすることに極めた。それからジヤドソン總長を再び訪問すると、今度は十分決心して署名もし、又發起人の紹介狀も書いて呉れた。其の外ここの部長などが皆同盟した。其の中で、特にボルトン博士は、先年輕井澤で逢つて、斯ういふ問題に就いて深く意見を交換した人であるが、此の人からもアメリカの大勢が非常に變つたことを聞いた。十五年前には斯ういふ話をしても迚も駄目であつたが、今では時機が丁度宜いといふことであつた。まだ其の外實業家學者にも逢うたけれども、其の頃シカゴは非常な暑さで、私も宿屋に居堪らず、涼しい領事館へ逃げて行つた位で餘り人が居ない。そこで居るだけの人々に交渉して、若し雜誌などを出す事になれば、大學の出版部でしてもよいといふので、其處の部長が態々計畫まで立てゝ見て呉れた。まづさういふ勢であつた。私は亞米利加に於ける歸一協會の中心は、シカゴかボストンか紐育か、此の三ケ所の中であらうと思ふ。其の次ぎにウヰスコンシン大學に行つて、第一に、先年私が東京でさういふ問題を話しあつた事のある、ロツス教授を訪うた。處がロツス氏は非常に喜んで、早速承諾して云はれたには、君が斯ういふ考を二年前に持つて來たならば、迚も亞米利加では成立が六づかしかつた。然し今日は其の時機であるのみならず寧ろ急務である。自分は出來るだけ心配をするといふ事であつた。然らば君は創立幹事の一人となつて、此の成立に働く考が無いかと言つたら、喜んで働きたいと云うて他の人々にも相談された。其の大學にはライシユといふ有力な哲學教授が居る。此の人も熱心に賛同され尙總長のバンハイス氏も斯ういふ事は年來の主張である、特に之が斯ういふ運動に依つて現れるといふことは最も重大な事であるから、私の力の及ぶ丈けは盡くさうといふことであつた。それから、斯ういふことを共

に話したならばよからうといふ人々を晩餐に招集して呉れられた。其處で色々の相談をしたが、結局男子部長、女子部長を初め、皆々賛成することになつた。それから次ぎにはオハイオ州の方へ廻つて、州立の大學及び其處の亞米利加全體の宗教家中に於て元老ともいふべきグラッデンといふ名高い神學博士、又私のアンドヴアーに於ける同窓バトン博士、其の他知名の人々を訪ねた。其處でも州立大學總長初め皆賛成であつた。特にバトン、グラッデンの兩博士は有力な學者宗教家等を招いてくれて、そこで歸一協會の話をした。斯ういふ席上にギユリック博士の手紙を公にしたなら、總ての傾向が分るだらうと思つたから、其處で始めて此の手紙を一同に提出した。亞米利加の傳道師や基督教徒は、之に對して何ういふやうに批評するかと思つて其の手紙を讀んだ。處が誰もそれに異論が無い。のみならず日本の此の重要なる運動の幹事中に我々の友人の加はつて居ることは、非常な光榮とするといふことであつた。グラッデン博士などは意見を書いて署名した。其の次ぎに行つたのはオハイオ州クリーヴランドのウエスタンリザーヴ大學で、其處の總長のツウイングといふ人は、世界の大學を研究して多くの著書もある有力な學者である。此の人は將來筆を以て貢献する事の出來る人である。矢張り此の人も評議員の一人として、特に英文雑誌などの出來る時に其の爲に盡すといふことを約束した。其の次ぎに行つた處はオベリン大學、こゝでも滯留してゐる時間がなかつたので、總長キング博士が着いた翌晩私の丁度逢ひたい人々、神學哲學の教授、其の他斯ういふ方に興味を有つて居る人々を呼んで呉れられた。其の席で一遍に相談が纏まるやうになつて、キング總長も評議員として盡力する事を約束した。此處は最も宗教的の處である。後に此處の神學部長のボスウオーヅ教授の署名及び賛成の理由を見たニューヨークのゼローム・グリーン氏は驚嘆して、氏の先祖は亞米利加ボードの創立者であつた事並びに其の先祖の言うた事蹟を引いて往古のアメリカンミツシヨンの精神を説明した。今日神學者やら宣教師等が歸一協會の主義主張に賛同し、心から協同することの出來るやうになつた事は實に注意すべきことであるといつて、一層同情を表された。その外コーネル大學の名譽總長ホワイト博士を始め、今の代理總長クレーン博士、まだ其の外の教授も前の大學と同様な有様であつて、此の地ではこの代理總長、文學科長ハル博士、及びグリフス博士は評議員たることを快諾せられた。クラーク大學、マウントホリヨーク大學、スミス大學、アモスト大學、ダートマス大學、ウエルスレー大學、其の他の大學團體等をも歴訪したが、いづれも同様の狀況で非常に歡迎され

た。一體前から日限をきいて約束して置いたので、紐育市は一寸手を着けかけた儘にしてボストンに行つたのであつたが、同市でも亦私の先生であつた人々も、殊に最も保守的人物と思つた人々迄も非常に喜んで呉れた。特にボストンでは、學者の外實業家も相談に這入つて呉れた。斯ういふ忙しい、且方面の異つた人が、皆評議員になつて、創立のことに骨折つてくれるといふことは實に意外であつた。最初ボストンに行つた際には、神學校で話したけれども、此處の氣運が果して賛成か反對か分らぬ。そこで先づ歸一協會の趣意を明らかに說明して、別にもう一つ私の意見書を一同に見せることにした。さうして私がエリオット博士を訪ねた時は丁度避暑地より歸つて混雜を極め、妻君は病氣であつた。さういふ忙しい時に拘らず、坐り込んで私の原稿を見て貰つたが、エリオット博士は親切に一々訂正してテニヲハまでも直してくれて、且其の意見書に同意し深き同情を表してくれられた。

さういふ樣なことで、先づ亞米利加の大勢が分つたが、之を永久の生命と力とにするには一の結合體でも作らないと、折角の機運が後戻りする虞れがある。それを作るに就いては、創立指導者が必要である。卽ち眞に之を終生の業として盡瘁する人が必要である。私は斯う考へたので、先づエリオット博士に向つて、之を引受ける人は君を措いて外にないと思ふと言うて意向を尋ねた處が、喜んでやりたいが、年を取つて居るから外に適當な人を考へる樣にとの事であつたから、然らば君は評議員として盡して貰ひたいといふと、喜んで承諾して意見を帳面に書いてくれられた。而してボストン市の人士は歸一協會の爲會合を催ふして呉れた。其の時エリオット博士も出席して熱心なる賛成演說をされた。此の會合は實業家學者等も大部出て來た。これらの人々は總て根本となるべき人であるから、私は非常に嬉しかつた。斯ういふ亞米利加の熱情ある人が不思議にも大部ボストンに居つたといふことは何よりの幸と思つた。而してエリオット博士の骨折で其處でも評議員が出來た。それから、紐育市に戻つて大學其の他の學者、私の友達の實業家等に話をして此處でも大いに同情を表された。次ぎはコロンビアで、こゝではデウヰイ、ギデイングス等の如き有力なる教授も評議員たることを承諾された。そこで私は總長バトラー氏を訪ねて貴國に於て此の運動がこれまでに運んだのをこの儘にして歐羅巴に廻ると、後が案じられるから其の前に出來るなら團體の成立を希望する。實は貴君の本を讀んで見ると、私の年來の意見と符合する處が多い。今云つた樣に何かこの主義を發達さす形式が出來ないと本當に遺憾であるから此の際是非君が立つ

てその組織の中心になつてくれぬかといふことを言つた。それなら一日考へさせてくれといふ。處が翌日になつて手紙が來た。その手紙の趣意はそれは大切のことゝ思ふが此れはインター・ナシヨナル・コンシリエーシヨンといふものと目的趣意が殆ど同一であるから、此れと共同して力を併せるといふことは何うであらう。此の方は合衆國だけでも七萬の會員があり、佛蘭西でも男爵デストーネル・ド・コンスタンなどが大變骨を折つて居る云々といふのであつたが、私は折返して左の返事を出した。

拜復　陳者過日小生より提議致し置き候問題に對し周到なる御考慮下され候御趣忝く存候。且又歸一協會をして佛國に於けるインターナシヨナル・コンシリエーシヨンと聯結したる一運動たらしめては如何との御親切なる御意見に對しても慥に諒知仕り候。

さりながら小生は若し歸一協會の目的を充分に實現せんが爲には別に之が獨立の組織を要すと云ふ確信を抱き居り候。先づ第一に該協會は單に平和運動のそれより以上に更に多分なる精神的運動の性質を含み居り候。卽ち所謂平和運動は主として世界各國間に於ける政治的經濟的方面に參與致し居り候樣愚考仕り候。之に反して歸一協會はもと〳〵日本國民が西洋文明と接觸するに至りてよりこのかた、漸く其の傾向著しく極端なる物質主義に對する調和策として設立せられたるものに御座候。此の運動が目的とする其の第一は今日まで日本に紹介せられたる數多き宗教々義の渾沌界に一つの普遍的なる倫理的根柢を見出さんとするに有之候。此の要求がやがて夫等宗教と宗教との相互理解を進めんとする計畫の必要と相成り候。而して吾等は遂にこの運動は世界各人種の理想各國民の確信の更に完全なる理解に依つて始めて大いに進涉せらるべしといふに想到いたし候。故に歸一協會運動は各國民の道德力を强大ならしむることに最も重きを措き候。斯くの如き運動は特に日本國民の進步發達の上に重要なることに候は勿論或は貴國に於ける商業主義に對する近時の攻擊非難に鑑み候ても貴國民の爲にも有力なる感化を有すべしと存じ候。之を要するに歸一協會と所謂平和運動との區別は唯一言を以て之をすれば、前者は主として其の物質的方面に參與候事に御座候。故に歸一協會は、必ずや、凡ての宗教的アスピレーシヨンと各國民の特質との廣く相理解さるゝ事を要し候。それなくしては決して、其の目的を達すること能はずと信じ候。斯く世界的にして又包括的なる人生觀、宗教觀を打ち立てんが爲には吾人に必要なる參考材料を廣く世界に蒐集

すべき筈のものに候。而して斯くの如き目的の爲には歸一協會運動は須らく同一目的を抱いて、あらゆる國々に奬勵せらるゝを可とすべきに候。これ卽ち小生が該會の組織を貴國に於ける識者の前に敢へて提議する所以に御座候。然るに小生も早や來る十一月の末には貴國を去らざるべからざる事情に相成り居り候に就き出來得べくんば、速に何等かの形式に此の運動を組織せん事を希望するものに候。就いては小生は貴下と、エリオット博士とがその組織の首唱者として適任ならんと信じ候。といふは、實は、斯くの如き首唱者なくしては、折角、この運動に贊同と同情とを表せられたる人にも實際其の運動の設立に對する希望を實現する力の集注點なきに苦しまるゝ事と推察仕り候云々。

今日亞米利加に於ける此の運動の着手に就いて最も大切なる問題は其の首唱者を見出す事に御座候。而して小生は此の問題を、こゝに再び、貴下に呈し、貴下の御熟考を煩はし度く候。

猶至急此の件について談合する機を與へられん事を併せて希望致候。謹言

さうして、其の手紙の屆く頃に行つてみて、手紙を見たかと聞いてみると、君の意味は能く分つた。米國にも歸一協會の組織せらるゝ事を望むとの事であつた。そこで前に諸君に一寸御報告申上げた樣にエリオット博士、バトラー總長其の他の有力なる人々に由つて、米國歸一協會が組織せらるゝに至つたのである。愈々ハーヴアード大學、コロンビヤ大學の中心人物を基と致してニューヨークに本部が成立することに運んだから、今度は氣にかゝつて居た、エール大學へ驅けつけて、總長ハッドレー博士を訪ねた。同博士は、其の目的、趣意、其の事業は贊成であるし、又自分も出來るだけは盡したいが、實際に此の運動に參加することは、愈々これが成立つて、結果が現れる時になつてからにしようといふことであつた。日本の事情に精通して居るラッド博士は早速贊成して評議員の一人にもなつてくれたのである。このエール大學を後廻しにしたのは、自分にも不本意であつたのであるが、何分時の足らない爲に止むを得なかつたのである。或は之が爲にエールの諸氏に對して敬意を缺いたやうに當るかもしれぬが、併し後で段々分つてくれるであらうと思つて、獨斷ながらさういふ處置をした。それから人に就いては餘程注意して選擇した積りであるけれども、それにも勿論批評はあることであらうと思ふ。

それから極く簡單に申しあげますが、次ぎは歐羅巴の方である。實は歐羅巴特に英國は保守的の國であるから、亞米利加の

如くに運ぶことは六つかしからうと私は考へて居た。珍田大使も、歐羅巴は事情が違ふから、亞米利加程に感じがないかも知れぬと言つて居られた。ところが英國に往つてみると、その表面、又其の實行の態度は如何にも着實であるけれども、その精神界は決して、停滞しては居らぬ。殊に學者社會は概して舊來の信仰に滿足せず、新しい根柢、新しい輿論を要望して居るやうである。私の滞在の時日は僅々一ケ月と三日であつたから、到底十分な研究は出來なかつたけれども、私の訪問面接した各大學、其の他主な學校の教授達の意見は大抵吾々の考と一致して、世界人類の精神は結局一に歸すべき筈のものである、新しい信仰、道德、教育は、その結局の一致點から出發しなければならぬといふ點に於て、殆ど異論はなかつたのである。

で、私の訪問した學校は、ロンドン、ケンブリッヂ、オックスフオード、エヂンバラ、グラスゴー、リード、バーミンガム、カーデフ等の各大學、及びイートン、ハーロー等の諸學校で、直接に面會し、又は書面で意見を交換した人は教授、宗教家、記者、實業家等を合せて四十餘名に達して居る。其の中左の十六名の人々は、英國歸一協會創立の曉には、その評議員たることを承諾せられたのである。その人名は

シドニー・ボール氏（オックスフオード、セント・ジヨンス・カレッヂ）
ブラウン博士（エヂンバラ大學）
カーペンター博士（オックスフオード、マンチエスター・カレッヂ）
クラーク博士（エヂンバラ大學）
ヘンリー・ダイヤー博士（グラスゴー市）
ガーヴイ博士（ロンドン、ハムステツト・ニユーカレッヂ）
ミス・ヒユーズ（カーデフ大學評議員）
ジヤクス博士（オックスフオード、マンチエスター・カレッヂ教授及びヒツバートジヨーナル主筆）
オリバー・ロッヂ博士（バーミンガム大學長）
マツケンヂー博士（カーデフ大學）
モールトン博士（マンチエスター大學）
ミユアーヘッド博士（バーミンガム大學）
バートン博士（マンチエスター大學）
サドラー博士（リード大學）
ゼームス・シーズ氏（エヂンバラ市、實業家）
シヤンド氏（ロンドン市、實業家）

孰れも英國第一流の學者、教育家、實業家であつて彼の國の社會に重きをなしてゐる人々である。その中で、ロッヂ、マツ

ケンヂー、ミユアーヘツド、カーペンター諸博士は、我が國の學界にも名を知られてゐる人々であるが、マツケンヂー博士は殊に最も熱心にこのことに賛成をされて、種々斡旋の勞を取つてくれられた。而して幹事となつて我が國及び米國の歸一協會との交渉には專ら、同博士が當られる筈である。ロツヂ博士も亦非常に熱心に賛同されて、英國にも是非この團體を組織して、東西相呼應して人類精神の統一的發展に貢献したいと話された。で將來愈々協會の組織される場合には、ロツヂ博士を中心として他の十五名が之を輔けて、斡旋されるやうな運びになるであらうと思ふ。

次ぎに佛蘭西に入つて、先づパリー大學のベルグソン博士に會つた。やはり熱心に賛同されてその成功を望む旨を書いてくれた。同大學總長リアール氏、及びその他の諸教授達もベルグソンと同意であるといつて賛同の意見を發表されたのである。次ぎに米國のバトラー博士の提議された彼の男爵デストーネル・ド・コンスタン氏を訪うた。氏は既に述べた通り、熱心なるインターナシヨナル・コンシリエーシヨンの會長で、種々社會救濟事業にも盡力して居り、現に、上院議員をやつてゐるのであるが、之も熱心に賛成をしてくれた。それから、嘗て日本の海軍に招聘されて長く日本に居て、今は巴里博士會院の一員で、日佛協會長の任に當つて居るベルタン氏、アンリ四世學院教授ガルニエ氏、女子高等師範學校長ベルゴン孃等にも面接して、皆同様賛成を得たのである。御承知の通り、佛蘭西では、宗教と教育とを分離した結果、教育は、既成の宗教宗派以外に精神的根柢を求めなければならない事情になつてゐる。この點に就いて、リアール氏などは大いに研究されてゐたのでこの歸一協會の主旨には、早速同意を表し、教育問題に関する自分の著述を私にくれたのである。又女子高等師範學校のベルゴン孃なども、同様の意見を持つて居られて、種々精しい話もあつた。一般にさういふ具合であつて、殊に、かゝる運動が日本から起されたといふことに深い同情と興味とをもつて、歡迎してくれたのであるから、時間が無い爲に十分熟議してゐることが出來なかつたけれども、將來何等かの形式に依つて相提携してこの事業をやるやうになる望みは十分であるのである。

其の次ぎには獨逸である。此の國は申すまでもなく、世界に名を馳せてゐる碩學の多數居る國であるが、大抵有名な人には會ふことが出來た。先づ彼のエナ大學のオイケン博士は、もはや、老境に入つてゐるにも拘らず、その學者的意氣の盛んなること驚くべきものであるが、歸一協會の主旨には全然賛成を表し、種々有益なる注意も與へてくれたのである。同大學のヘツ

ケル博士は、今は八十有餘の高齡に達し、もはや教鞭を執るの勞には堪へられないのであるが、なほ助手を督して、孜々研究を續けて居られる。老年のために、私には快く面會を承諾せられ、種々懇切な待遇を與へられた。而して私が歸一協會の主旨を述べたに對し、鉛筆をもつて、圖形をこしらへながら、學說ではオイケン博士と、正に相反する南極に立つてゐることを語り、而もこの歸一協會の旨意に就てはオイケン博士と全然同意見であると言はれた。同教授ライン博士、宗教學者として知られて居るベルリン大學ハルナック博士、ライプチヒ大學のヴント博士、エネルギー學者のオストワルド博士、史學の大家ランプレヒト博士、其の外の學者、教育家、宗教家達にも會つて、一々賛同されたのである。概して言へば、獨逸では各大學各學者が皆自家にオーソリチーを持つてゐるので、彼等相互に、又從つて外國と容易に協同し一致して或運動を起すといふやうな氣運にはならない。彼の平和運動なども、獨逸ではあまり受け容れられてゐないのである。併し、この歸一協會の主旨は全世界的、終局的の根本の問題で、物質の交換でなく、寧ろ人格の交換である點は、餘程彼等の賛同を強め得た點であつたやうである。又醫學、哲學其の他の學藝に就いては、何等東洋から得るところはないが、儒教等の研究に於ては日本の學者の助力に俟たなければならないところが多々あると考へてゐるやうであつた。さういふやうなところから端緒が開けて、將來この獨逸の學者教育家等と協同運動を爲すやうになる望みは十分あると感じて居たのである。殊に、エナ大學に於ては、米國に於けるエリオット博士、英國に於けるロッヂ博士に委囑した樣なことを、オイケン教授にも依頼することが出來るであらうといふことを思うた。少壯神學者として名聲を出して來たヴイネル博士は、吾々にこの運動、團體の組織を始めよといふ意味かと問うた位で、こゝで此のヴイネル博士を幹事に頼めば、オイケンや、ヘッケル其の他の先輩も居るのであるから、一つの組織が成り立たないとも限るまいと考へられたのであるが、獨逸學界の事情は前にも云うた通りで、他にも幾多の重要な大學があるのに、未だ事情に通じて居ない私が輕卒に、さういふ處置をするもどうかと思うてさし控へたのである。兎に角、右のやうなわけであるから尙十分研究して、骨を折つたならば、獨逸にも一つのまとまつた團體が出來て、日本とも亦他の各國とも協同一致の運動をするやうな氣運になつてくるであらうと私には思はれたのである。

其の他ブラッセルの萬國中央協會の創始者オトレー氏の如き、ローマの世界理想市計畫者アンデルセン氏の如きは、重要

なる賛同者で、將來はこの人々を中心として、その各地に此の運動を起すことが出來る積りである。又魯西亞にも希望は有つたのであるが、最早や豫定の時が來た爲に、不本意ながらそれだけにして歸つたのである。

大體まづ右に述べたやうな有樣であつて、甚だ有望であるが、何分十分に研究し、熟議をしてゐる暇がなくて、匆々に歸つて來たわけであるから、氣が付かなかつた事は勿論、氣の付いたところでも脱漏が多かつたのである。それで續いて誰かまたこちらから人が往つて、この運びをつける必要があることゝ思ふ。

（「歸一協會々報」第二）大正二年七月

歐米婦人思想界の變遷

近來歐米に於ける進步發展は只統計に現れて居る外部の發達のみならず、其の內の力卽ち女子の智力、理想力、品性及び其の間に現れて居る問題の上に、非常な勢力を以て高まつて來たやうに感ぜられる。其の變化は何に原因するかと云ふと、畢竟一方は女子の內的生活の進化と、一方は近代の社會全體の變遷進步が、悉く女子及び家庭の上に著しく影響を及ぼして來たからである。

歐米に於ける社會變化の狀態

そこで如何なる有樣を以て進步して來たかといふと、

第一に數ふべきものは近代歐米に於ける政界の變化である。丁度私の行つた頃は米國、佛國に於ては大統領選擧の時で、又英國、獨逸に於ては國會の開會中であつた。何れも傍聽する機會を得たが、最も歐米の政變の甚しき時に遭遇して其の變化の著しいのを感じた。無論皆さんも御承知の如く、米國、佛國は共和政體で獨逸、英國は立憲君主政體であるが、之等の共和國及び君主國の國々のみが種々の變遷を來して居るかと云ふと、決してさうではない。諸國悉くその變遷の度合事情は相異つて居るが、一般に進步變化して來て居るのである。所で其の思想は如何なる風に進みつゝあるかと云ふと、之は古い言葉で最も新しい意味に使はれて居る所のデモクラシー主義（民衆主義、同胞主義、平等主義）である。英國、獨逸の如き君主政體の處に於ては反對もあるやうに思はれるが、其の實今日の政治の理想は皆デモクラシーに一致して居るのである。併し其の中でも先鋒となつて居るのは亞米利加合衆國で、殊に近年大統領選擧に勝利を得たウヰルソン黨が最もこの米國をして進步させよう

として努力奮闘したのである。處でデモクラシーに就いての定義はリンコルンが言つたものが一番亞米利加の政治主義を云ひあらはして居ると思ふが、畢竟デモクラシーは人民の爲に人民が自動する政治といふのである。

而して此のデモクラシーは政治ばかりでなく宗教、教育凡て此の精神を主義とするのである。故にシカゴ大學のハーパー總長も、大學の空氣がデモクラシーでなければならぬと論じて、校風に之を應用するやうに勤めて居つた。卽ち以前の學校は學校本位であつたが、今日の學校は兒童本位である。兒童の心理を研究して、其の兒童の內から出る要求に從ふやうにするのが今日の學校制度である。獨り政治教育のみならず、宗教、社會一般の制裁もみな此の主義を以てするのである。

前にも云つたやうに此のデモクラシーは決して新しく生れ出た言葉でなく、世界歷史あつて以來の主義でアゼンスあたりでも實現しようとした事がある。併し當時此の主義に取扱はれた國民は極少數で、其の他の大多數は奴隷であり束縛を受けたもので、中でも女子は其の時は一つの財產に過ぎなかつたものである。然るに今日のデモクラシーは其の內容が非常に變つて居て、婦人、子供、勞働者すべて人と云ふ名のつくものには悉く適用され實行されて居るのである。

米國に於ては從來國民が大統領、裁判官其の他悉く代表者を選んで、其の政治は之等の代表者によつて執られて居たが、其の任期中は假令國民の意志に叶はぬ事があつても法律に關する程の事でなければ國民は改選の期迄如何ともなし得なかつた。然るに近來種々の弊害が起つて來たので、昨年の大統領選擧にはダイレクト・ガバーメント（人民が直接に政治をとるといふ事）を以て其の中心問題とした。其の主なる條項は

一、イニシアテイブ（人民自ら動機を提起し必要の法律を作り又は法律を修正する權利を持つこと）

二、リフレンダム（一般投票に訴へて問題を決定すること）

三、リコール（州の役人裁判官の如き自ら選んだものを其の期間と雖も罷免する事を得、又役人が不正な判決をすれば人民は之を破棄する事が出來る）

此の主義によると、弱い國民からも女子からもすべての訴へを聞いて凡ての自由と便宜を與へ、而して個人々々をして各々の內から要求し發達させる樣にする主義である。で婦人が投票權を得ると云ふ事は婦人からの要求であるが又政府からも起つて來たのである。其の結果ダイレクト・ガバーメント主義は婦人に參政權を與ふる事となつた。其の內の有力なる指導者の言つた內に

女子も男子と同樣經濟的及び社會的生活の一部を占むるものである以上、男子同樣經濟問題、社會問題を決定するに當り投票權を有するは當然である。婦人も賃金取りであるならば勞働問題を決すべきである。婦人も亦財產所有者であるならば租稅問題に參與すべきものである。婦人は母であり妻である以上家庭に關する問題の決定を助くべきものである。是等の問題は凡て國民の問題である。而して國民は凡べて家庭の暖爐の側に住むものである。人或は云はん、婦人は戰時に於て國民を防禦すること能はず、故に婦人は平時に於て國家の運命の決定に參與すること能はずと。されど吾人は之に答ふるに、婦人は國難に際し男子が銃を取つて苦しむが如く、等しく又公に奉じ難に苦しむものなりと。又曰く婦人は國家の兵士を生む、其の子息が國家の干城なる如く等しく其の保護者たる者である。

と、之は其の論の一部を讀んだものである。中には或は反對者もあるが非常に有力な識者の間に賛成がある。

英國も亦同樣であつて、婦人が參政權を稱ふるのは矢張り只我が儘の爲に得んとするのではない。サフレゼスト等も手段は面白くないが、其の主義とする所は中々立派で、正々堂々と社會に訴へて行く、其の根本には實に眞面目な根柢があるのである。處で今日は政治と社會とは離るべからざる關係になつて居つて、人民自らすると云ふ勢ひが非常に進んで來て、之が女子の上に又家庭生活の上に影響を及ぼして來たのである。

第二は實業經濟の變化である。殆ど之までは女子は內を守り男子は外を守るといふ有樣であつたが、近來凡ての實業經濟は大なる組織の內に含まれて來て、單獨に女子が內に於てする仕事は殘る所なくなつた。併し生きると云ふ事は男女共に必然的のものであるから、從つて女子も此の大なる組織の內に入らねば生きる事は出來ない。何人と雖も大なる變化の中に投入れられて支配を受けねばならぬ事になつた。それには之に順應する力、卽ち、德が備はらねば婦人と雖も到底生きて居られぬ事になつたのである。

第三は精神上卽ち宗教道德の變化である。これ又二十年前とは雲泥の差を生じて來て迷信的、宗教的、固定的のものは漸次に其の勢力を失つて、世界的精神關係となり、到底頑固偏狹な事を云つては世に立つことが出來ないのみならず、自らも精神の滿足を得られなくなつたのである。

斯くの如く社會の三方面から急激の變化を及ぼして來たので、社會の單位たる家庭の生活が又非常に根本的に變化し來つたのである。卽ち之が今日の婦人問題、社會問題の發生した著

しき原因である。

男女性の區別問題

前きに述べたる如く世界人類の生活が非常に變化して來たので、女子及び家庭の狀態も自ら變つて來たのである。卽ち今後生存を續けるには非常なる力、思考、努力を要する事となつて來たと同時に樣々の困難と戰はねばならぬ事になつたのである。處で先づ第一に

男女性の區別問題を知る必要があるのである。此の問題に就いては從來も種々なる說があつた。曰く今日は男女の區別が段々薄らいで來て、敎育、社會、學問、職業總ての上に其の區別を立てぬ傾向になつて來た。女子が男子と異つて居るのは境遇、遺傳、習慣、殊に社會的遺傳の然らしむる所で、其の習慣の久しきより斯く隔つて來たのである。事實から見ても實際西洋では仕事の上、學問の上に於て女子が男子に劣らない。學士にもなる博士にもなる、近來は戰爭にも出て男子を凌ぐ有樣になつて來た。只男女といふ區別は生物學的にあるのみで、深い精神的、人格的のものになると、男女の別が薄らぎ或は無くなるのが自然である。之が今日の歐米の思想傾向である。と云ふやうに觀察する人がある。又一方には我が國が此の勢力に誘引されて段々女子が男性化して來ると、我が國體の最も重んずる所の忠孝の道を破り、家族制度を破壞して將來憂ふべき事であると憂慮する人もある。併し是等は何れも極端に走つて、眞相を察知したものとは云はれぬ。然らば眞の意味の男女の別は如何なる處にあるかと云ふと、卽ち男女は各々異なつた特性を持つて居るものである。文化の法則は異なつた二つのものが、調和化合して更に新たなものを生み、各々の特徵が進んで行つて、新たに異つたものが出來ると云ふ處に進化の基があるのである。

男女を同一性のものと斷言するのも謬見と云はねばならぬ、之は價値問題である。卽ち男は尊く、女は價値がないとか、又は男は主人で、女は奴隷であるといふやうな考に對しては、女子も同じく價値あり、人格あるものといふ考を以て男は女を尊敬せねばならぬといふ點を明らかにしたものである。文明の進むに從つて男女の特色は益々明らかになり、同時に其の間の關係が密接に平等になつて來るのである。

異性間の關係に對して歐米の理想は如何に變遷しつゝあるかと云ふと、之は根本問題で、今日の歐米は此の問題が著しく八釜しくなり、又識者の間に大分解決がついて來た。性の問題は卽ち人生の發達問題—人類の運命問題である。これは十八世紀

に發生した生物學及び廿世紀に發達した心理學及び之と離れる事の出來ぬ社會學—哲學—形而上學—本態學といふやうな種々の學問の發達と共に非常に進んで來て益々男女の性が鮮明になり、又其の關係が了解されるやうになつて來たのである。然らば其の生命(ライフ)とは如何なるものかと云へば、是に種々なる說が出來て居る。今日其の種々の說が妥協でなくして各々獨立して相一致する完全なる學說を立てる事が出來るやうになつた。例へば一元論、二元論、多元論が調和する關係も矢張り皆生きたる關係で、人間の心理的の關係である。我々の自然性にも矢張り此の三つの要素がある。

一、「ヒューマンネーチュアー」卽ち人—愛(互に引合ふ所の情—宗敎の愛、孔子の仁、佛陀の慈悲等を意味す)

二、「セックス」卽ち性(人には男女の性がある、此の考、此の理想は生物學と心理學から出たものである。是は遺傳によつて保存され、細胞によつて代表して傳へられる)

三、「インディヴィデュアリティー」卽ち個性(男とか女とか云ふのでなく、個人と云ふものは一つの特色がある)

以上の三つのものが一つになつて人となつて居るのであるが、從前はこの「人の個性」と云ふ事を餘り認めなかつた、殊に婦人には認めなかつた。

婦人の自覺

今日婦人が自覺したと云ふ事は其の「人」と云ふ尊い所の自然があると云ふ事を自覺して來たのである。人が土臺になると云ふ事を認めて來たのを自覺といふのである。此の自然は男、女の區別はない、誰にもあるものである、而してこれが宇宙の根本性である。

其の次ぎには男女と云ふ性である。男女の性は根本的に異つて居るものではなく、その各々が持てる自然性の分量が、男は男の性が勝つて居る、女は女性の量が勝つて居るからである。卽ち兩方面あるが其の勝つた方の自然が其の性を作るのであると云ふ說が權威をなして來るやうになつた。今一つはユニークネス(唯一)とかインディヴィデュアリティー(個性)が備はつてこれが天才となり、又各人の天職となるのである。此の三つのものは卽ち人間の三位一體である。

家族の理想

さて社會の單位となるものは家族であつて、西洋の家族の理想は夫婦である。男女の性は各々片われであつて、此の片われが一緒になつて完全なる單位となるものである。精神的の性と

性とが相合體する所に生命が出來るのである。又日本の家族の理想は親子である。家といふ觀念は「父—子」これが日本の家族制度の理想で、又社會の理想である。卽ち家族の要素は夫婦、親子と云ふ要素があつて之が家族をなし、又社會を爲す所の原因である。我々は親子と云ふ情又は友と云ふ情（人間と人間の理想的關係）を離れては生存する事が出來ないやうになつて居る。然るに今日の婦人問題は遂には婦人或は男子にも獨身生活又は孤獨生活の止むを得ざる結論になるのではあるまいか。

極端に云へば、性と云ふ事に反抗するやうになるのであるといふやうな考もあるが、之は皮相の考である。繰返して云へば今日の婦人の問題は婦人の覺醒、人間の理想實現である。卽ち今日の女子は昔の女子に比してどの程度迄男子と同程度に進み得たかと云ふと、昔は女は幼にして父母に、嫁して夫に、老いては子に從ふといふ、畢竟女は子供を產むもので、自分の德なり智なり凡てを子供に傳へ、又夫なり子によつて自分を傳へるものとなつて居つた。故に女子は未成品であると云ふ考で支配して居つたが、今日は其の誤りなる事を見出した。女子も亦意志の發表に於て、決して男子に劣るべきものでないと云ふ事が解つて、自ら獨立の生活（男子と離別する意味でなく）をする、自ら支配し、自ら確定し、自ら活動し、獨立の價値を保ち、自ら男子同等の階段に上らうと云ふ目的を立てた。而して又男子をして婦人の美德卽ち神聖　犧牲的精神—に迄引上げて行く、畢竟人類のレベルを高めると云ふ所に理想を置き、又其の理想に奮鬪しつゝあるのである。斯かる變遷は卽ち從前の女子の本分をして變らざるを得ざらしめたのである。何れの國に於ても野蠻時代には男子は常に軍事を司り、女子は內に於て衣食住乃至職業を整へ、四圍の境遇に子女家庭を順應せしむるといふ事を司つた。故に其の當時の職業は女の手にあつたが、其の後社會が整頓するにつれて軍事は稍閑になつた。すべての男子が軍に從ふ事がいらないやうになつた。軍事の方面も分業するやうになつてから、男子の大部分は職業に從事するやうになつた。爲に女子は職業を司るの必要がなくなつて、今度は家庭に在つて消費の經濟を司るやうになつた。所が之も亦變遷して今日は歐米の天地は科學の應用を以て大規模の工業卽ち各々の分業が盛んになつて來て、從來婦人が家庭に於て營んで居た所の裁縫其の他職業が變じて社會の工場で營まるるやうになつた。そこで婦人の職分も再び變じて家庭以外に於ける婦人の職業と云ふ事が稱へられ行はれるやうになつた。從つて働きに必要なる學問、藝術が必要になり、女子も男子と同樣に高等の教

育を受けねばならぬ事となつた。

結婚の意義

又結婚に對してはどういふ考が起るやうになつたかと云ふと、彼の所謂賢母良妻と云ふ意義は其の名は同じく良妻賢母でなくてはならぬが、其の內容意義は大いに變つて來た。結婚する以上は妻たるものは妻の本分を盡すと云ふ事は變らないが、併し其の本分の意義が變つて居るのである。

古い結婚の意義は生物學的である。子孫を繼ぐと云ふ事畢竟肉體的生物的意義と又經濟的意義（家名家產を繼ぐといふ）が結婚の主なるものであつた。

今日の結婚の中には此の意義もあるが、其の根本義は精神的になつた。人格的土臺の上に基く所の關係になつた。卽ち其の兩性が一つになつて完全なる「人間」になる。又其の各自に一つの「人格」「個性」がある。其の個性が必ず二つ相合うて益々完全に發達するものである。其の社會と云ふものゝ理想的の單位、その精神界宗教界の單位を完成するといふやうな理想、卽ち精神的土臺に組み立てるといふ事を以て結婚の本義とする、之が本となつて定めた所の結婚が初めて完全する事が出來るのである。故に誤つた自然主義から稱へられたる自由結婚は所謂本能主義であると云ふやうに解するのは誤つて居る。矢張り男女の個性及び理想があつて其の根本から出る所の眞の要求、自分の意志の選擇によつて結婚問題を定めるといふ意味でなくてはならぬ。是が歐米の所謂眞の自由といふ意味である。又歐米思想界の理想である。從前の日本の結婚に對する解釋は多く他人に依つて支配され、又舅姑の意志に又は夫の意志に從ふといふ事が美德となつて居つた。これも勿論必要なる美德には違ひないが、從順が極端になつて盲從となり、又は意志不明瞭となつては結局完全なる生活が出來ない事になる。

男女の特性に對する理想

是が以前とは大いに異つて居る。卽ち男尊女卑といふ事は大いなる誤りであつて、男女共になくてはならぬ所の特徵を持つて居る。男は男らしく、女は女らしい性がある。併し之は絕對ではなく畢竟男は男らしい、女は女らしいと云ふ性が勝つて居るのである。卽ち同情、直覺力等は女子が勝れて居るが、勇氣、知力、了解力、又組織的方面の働きをなすと云ふやうなる點は男子の方が勝つて居る。けれども其の男性女性は其の異彩を自分に吸收する所に於て益々其の天分を發揮する事が出來るのである。故に男子は自分の特性を傷つけずして女性の同情、

犧牲、直感力を女子より受け取つて其の缺點を補うて行く事が出來る。婦人は又自分の同情心、親切心を失はずして男子の意志、果斷、强健、論理的、判斷力などといふものは男子より感化を受けて行くといふ意味に於て自分の内にある力を培養して行く事が必要である。卽ち兩方面の備はる兩要素が發達すると云ふ事は何れの性にも必要である。併し英國の婦人參政權運動をする婦人のやうに男子の眞似をして燒打ちをしたり、暴行をしたり、男勝りの女性になつたりする事は誤りである。卽ち女が男に反抗し、男が女に競爭をするといふ事は誤りで、女は男の不足を補充し男は女子を扶ける、卽ち共同的に社會に於ても家庭に於ても進んで行く事を根本義とせねばならぬのである。

斯くの如く理想は定つて居るやうであるが、未だ眞に定まつて居るのではない。今日程女子問題が混雜を極め、又入亂れて居る時はない。故に女子の眞の行を實現しようとするにしても容易な事ではない。歐米に於ても猶その古い思想と新しい思想とが相戰つて居る。卽ち男女對等―男女相互といふ理想と男尊女卑といふ觀念、女子は奴隷といふ思想、卽ち相敬論と女子屈從說と相戰つて居る狀態である。婦人が苦鬪碎心してゐるのである。併し此の過渡の女子の境遇の困難なる事を我が日本の現狀に比べて見ると我が國の女子の生活は一層困難と言はねばならぬ。

概括して見ると今日の理想は「人」と云ふ理想を實現しようとして居るのである、而して教育は主に二十五歲迄は人としての教育を授ける。人としての興味卽ち男女と云ふ區別を超越して居る所の興味、趣味、愛といふものが一番盛んな時は二十五歲迄である。而して二十五歲迄は男女の區別といふ事を考へないで、又考へずともすむやうに教育して行かねばならぬ。二十五歲より五十歲迄は賢母良妻としての理想を持つ事が必要である。五十歲から七十五歲迄は經驗が熟して此の間に國民としての義務を全うする。社會の爲に、宗教の爲に、教育の爲に國家の一員として最も力を盡すべき時となる、其の後は經驗を味ふと云ふ時代になつて來るのである。人間の生涯は以上の三要素に通じて居るものなれど、其の順序に依つて或階梯々々を進むものであるから、先づ方針を立てゝ各自に健全なる進步發達を遂げることが必要である。

（「家庭週報」第二百三十三號）大正二年七月

人を高めよ

本年度に於ける集注点

昨年の卒業式には、當時の精神及び希望を明かにする爲めに、深く考へて充分經驗しなければ解りかねる樣な、精神的問題に就いて述べて置きましたが、其生命が過去一年間に如何なる形を以て現はれたであらうか、深く内に潜んで居る種子が、第十一回生に於て、大に其の生命を延ばさなければならないのである。

皆さんが此の學年の初めに於て進んで行くべき点、又現はさなければならぬ特性に就いて、考へて置く事は、最も必要な事である。今日は私共が平常望んで居る事であり、且皆さんは内に力を集注して深く考へなければならぬ事に就いて、述べて見度いと思ふ。

實は私は昨年此の芽が出る事と、思つて居つたが、其の延びる力は、後れて居る、卽ち實行は出來て居るが、其の延びる力つまり原動力が充分でないと思ふ。

故に本學年に於いては充分に此の点に集注して大に其の芽を延ばさなければなりません。も一ツ之れを言ひ換へるならば各自の力卽ち程度を高めなければならないのである、併し此の程度を高めると云ふ意味が如何なる事であるかは大いに考ふべき問題である。

程度とは何ぞや

彼の英國監督セシル氏は私に向つて「日本と獨逸とは問題を教へるが英國では人を教へると思ふが如何」と云はれましたが、私は之れに對して、「然り」と云はざるを得なかつた、次にセシル氏はメービー博士に對して「米國は何れに屬しますか」と尋ねられたが、博士は黙して答へなかつた、此の意味は皆さんにも解る事と思ひます。

畢竟日本の教育は問題に就いて智識を授けるのであり獨逸では問題に就いて深く研究力を與へてあつて又其れがよく出來るのであります。

然るに英國では人を教へるのである。唯分量を增し問題の複雜さを增加するのではない、つまり人を作ると云ふのであつて獨逸の教育法とは大に異つた点がある。例へば獨逸では數學を授けるにしても唯代數幾何のみでなく測量や三角術までも教へると云ふ有樣で、つまり智識の程度が高いのである。

然るに英國の教育に於て程度を高めると云ふ意味は人を高める、と云ふ事である。今私が程度を高めると云ふ事も、つまり之れと同意味で、各自の價値を高める、卽ち内に働いて居る力を高めると云ふ意味である。

價値とは何か

然らば其の價値とは何であるか、凡て吾々の所有物は偶然であり一時的のものであつて、且つ價値の少いものである、故に自分の價値は、所有物ではない、又何を爲したかと云ふ事でもない、然らば何であるか、「我れ」である、我れ自身が永久に必然的なる我れである、無限で尊い處の我れである、而して我れは卽ち人格であるから、我れが爲した事柄が我ではなく、唯我れと云ふものに眞の價値があるのである、元來人は非常なる力の源を有して居る、而して之より發生し來る力が、自分等を延ばしもし向上もさせるのであつて、之れを自動の力と云ひます、而して此の力が人格であるが故に其の力を高める事が大切である。

故に程度を高めると云ふ事は智識の分量を云ふのではない、全く人格そのものを高めると云ふ意味になるのである、之れに依つて力を延ばすと云ふ意味が解つた事と思ふ、自分で自分を發現しやうと思ふ熱心があつて經驗しなければ眞の意味は解らないのである。

反動と反省は人を高める

故に本學年は、如何に勉强するかと云ふ方針を定める事が必要である、此の方針に依つては問題を教へると云ふ事にもなるのである。

本年度の能力を延ばすと云ふ意味は生きた智識を學ぶと同時に、大に四圍の境遇に、反動し且つ反省して人を作つて行かなければならぬと云ふ意味である、自動力の動く處に必ず反省が伴はなくてはならぬ、斯くしてこそ初めて眞の教育を受けた事になり、生きた學問をした事になるのである。

例へば歴史を學ぶ場合に於ても、其の第一の要件とする處は唯其の事實を知るばかりでなく、尙一歩を進めて、其のものゝ眞相に觸れ、其の關係を見出して、生活の意義を了解し其のものゝ眞意を採る事が大切である。又斯くの如く生きた學問を爲すには趣味と興味とが必要である、趣味あり興味あつて初めて新らしい力は現はれて來るものである、畢竟眞の學問を爲すと云ふ意味は其の智識の實體がとれ且つこれに反動して內に一種の力の見出す仕方である。

世界の大勢より受くる刺戟

目下米國のロッキー山以西に於ては一方里の人口が平均七人位でありますが我が日本は同じく一方里に平均三百六十人位で

ある、又英國や獨逸は領地も多く且つ良い地方を領して居るが、我が日本の國は今如何なる狀態であらうか、領土はせまく人口は日々に增加しつゝある今日どうしても一ツ國民が覺醒して大に世界的に發展しなければならぬ、實力を進め人格の實質を高めて大に我が國の運命を開拓せねばならぬ運命にあるのだ、彼の加州の問題の如きも將來日本の運命に大なる關係のある事は勿論である、其れを我が國民は今更の如くに騷ぎ立てゝ居る、又彼のパナマ運河開通の期到れば必らずや世界の大勢に新なる關係を生ずるであらう。

併しながらかゝる刺戟は我が同胞の頭腦に如何に反響しつゝあるであらうか、吾人はよろしく此の世界的刺戟に對して反動し且つ反省して、行かねばならぬ、此の点に於て吾が同胞は他の文明國民に比して、大に鈍いと思ふのである、彼の歸一協會の如きも日本が發起したのであるが日本から世界的万國的問題を提供したのは今回が初めてゞある、然るに世界は之れに對して直ぐに反動した、就中米國の如きは一ケ月をたゝずして歸一協會の設立を見たのみならず、間もなく代表者として有力なる者を吾邦へ派遣したのである、實に其の反動の速なるには驚かざるを得ない。故に斯くの如き一例を見ても如何に文明國が四圍の境遇に反響するかゞ解るであらうと思ふ。

吾人は大に境遇に反動せねばならぬ

眞の學問は境遇に反動して行くのでなくてはならぬ、皆さんは今非常なる境遇にあるのである、實に、前述の如き境遇は皆さんのために最も强き刺戟を與へて居るのである、故に此の好機を失する事なくよく之に反動し以て自動の力を延ばさなければならぬのである。（文責記者）

（「花紅葉」第十二號）大正二年

明治天皇祭に祭して

過去二十世紀に於ける世界文明史を飾るに足るべき事項は數ふるに遑がないが、其の中で最大の事項ともいふべきものが世界に二つあると云ふ事は識者の異論がないところである。

第一は世界各國を東西に分けて、先づ西洋に於ては歐羅巴を指導すべき天職が佛蘭西皇帝の手より獨逸皇帝の手に移つた事である。第二は東洋に於ける文明指導の地位が支那皇帝及び露西亞皇帝より日本皇帝の御手に移つた事である。吾々は今日此の最も印象深き第一の明治天皇祭に當つて斯くの如き御偉業が如何にして御成功になつたか、斯かる大運動は何れに存するか

を考へねばならぬ。

謹んで考ふるに第一の原因は　先帝陛下が御實算御十八、九の御青年時代に、我が國の國是として御立てになつた國家根本の行動、其の時期に應ずべき大目的、理想を御確定になつた事に歸さなければならぬ。此の國是の眞髄とも成るべきものは慶應三年十二月末に御發表になつた　陛下が御熱誠をこめて神明に御誓ひになつた五ケ條の聖文によつて拜察する事が出來る。

第二の原因は國家の目的理想を實現すべき方法として舊來の制度を改良充實なし給ふたと云ふ事にある。即ち制度の封建制度を廢して廢藩置縣とせさせ給ふた事である。自治制度を施かれ、從來の陋習を破り、世界の大勢に鑑みて、國家の生命精神を發揮するに必要なる機關を有機的組織に御改めになつたと云ふ處にある。

第三は其の有機體に缺くべからざる所の諸機關を世界最新の範に則り、最新の科學を應用した所の設備を整へる事に上下擧つて熱注したと云ふ事である。先づ第一に國防機關として陸海軍を歐米に慣ひ、實業發展の爲に商工業を具備せしめ、其の他國體運用に必要なる設備を改める事、補充する事に是日も足らぬ有樣であつた。

第四の原因は　陛下猶御幼少に渡らせらるゝ時に既に此の大任に當らせ給ひ、國家の生命たる有爲の人材を擢んでゝ其の衝に當らせられたと云ふ事である。吾々が子供の時には百姓―町人―武士―といふこの間に非常な區別があつたものである。然るに足輕町人が大臣になり、小使の息子が縣知事の地位に昇ると云ふ大變化が來つた。是は其の時代の青年に淺からぬ印象を與へた。所謂舊習を破つて新習慣を發生せしめたる維新の變遷であるが、斯くの如き御英斷は殊に吾々が今日　陛下の御聖德として感ぜざるを得ない次第である。

第五の原因は畏れおほき事ながら　陛下の御人格の高潔神聖なる所、其の御懿德の耀々たる所に歸さなければならぬ。實に明治の刷新維新は　陛下の御人格によつて充實された事であると拜察し奉るのである。

吾々は　陛下の御鴻業を繼續する責任を鑑み奉らなければならぬ。（大要筆記）

（「家庭週報」第二百三十四號・大正二年七月三十日の擧式に於て）

青年の健康力

昨年は本校に於ても健康の統計が少しく以前よりも度が降つ

て、神經の不健全なる人、又少しく呼吸器を痛めた人が出た樣であつたが、今春に於て大いに挽回する事が出來、殊に此の夏期に學生各自が非常に注意したと見えて、此の秋は餘程昨年と變つた報告を得る事が出來た。併し廣く我が國全體を考へると誠に遺憾なる事が多い。

近來人間の最も活動發達する時卽ち十七、八より四十歲に至る時期に於て、我が國民の最も侵されて居る病氣は結核である。其の內殊に多數を占めて居るのは肺結核であつて、兒童敎育に直接携つて居る小學校敎員の中にも、該病に侵されて居るものが一萬人の多きに昇つて居ると云ふ統計を示して居る。之を以ても少年靑年の鼓舞振作に努むべき敎育者の意氣消沈、無氣力、生活術に暗いといふ事が解るが、是は結局我が國敎育の弊卽ち機械的、注入的敎育に陷つた結果と云はねばならぬ。

單り小學校敎師のみならず國民全體の肺結核の統計は每年增進を示して居る。是を彼の獨逸、英國の如き國に就いて見るに、彼の國に於ては每年其の數を減じて行きつゝあるにも係らず、我が國は實に反比例を示して居る。かく病氣に打ち克つ事の出來ぬ我が國民が現狀の儘を續けて行つたならば、果して外國との競爭に於て勝利を得る事が出來るであらうか。況して國民の母たる婦人の呼吸器の弱いと云ふ事は將來誠に憂ふべき事である。斯かる事に無頓着に身體の健康を無視して迄も、無闇に知識を注入すると云ふ事は非常に根本を誤つた仕方である。飽くまでも奮鬪に堪へ得る國民となり、身體の全身を働かし、神經を健全に保つて、其の活動が有効に出來て初めて國の將來の發揚も望まるゝのである。

秋は最も運動をするに適當なる時機である。郊外に出でて種々の遊戲運動をする事も、步行を試みる事も、凡て愉快に出來る時であるから、此の時を用ひて大いに其の方法を講じ、各自に適當した仕方を見出だす事に努めたい。

身體の健康をはかり衞生に注意して常に生理、衞生、心理學等の原理に從ふもよい。眞理に柔順なる事も大切であるが、今日の敎育は只其處迄に止まつて居るやうに思ふ。卽ち敎育は眞理に從ひ規則に服從するに依つて目的が達せらるゝと思つて居るやうである。併し唯夫れ丈けでは眞の健康は得られない。然らば如何にして眞の健康を得るかと云ふと、卽ち各自自ら己に適當した方法を見出だし、其の方針に基いて實行に努めるのである。腹式呼吸とか坐禪の如き形式を以て其れに從ふ所の方法は比較的容易であるが、自らの身體に應用して最も適當なる方法を見出だすと云ふ事は中々困難である。

應用は一種のアートである。音樂にしても歌の理論、音樂の

法則、音律を學ぶは易いが、立派な聲を以て音律に合はせ歌ふと云ふ事は難かしい。應用は自らの心身にあてはめる事であるから、自らを最もよく知らねばならぬ。故に是は精神的の事業である。一つの修養である。我と云ふ全體を完全にするには我の一部から起る處の本能とか衝動とかに動かされて居つては本當の發展は出來ぬと同じく、吾々は一部丈けの事を行つて居るのみでは全體の健康を增す事は出來ない。

第二に必要なるは改善と云ふ事である。本校に於ては學生各自自らの要求の出る限り、出來得るだけ設備の上にも改善を加へ度いと思うて居る。今回評議員會で種々設備を改善する事に評議が定まつたが、如何に構造を替へ、設備を改革しても、學生自らが改善する處なければ勞して益のない事である。

我が國は今日外からは種々な壓迫を受け、內は職を得ずして困つて居るものが澤山あると云ふ有樣である。のみならず我が國高等學府を出た人、外國から學位を持つて歸つた人、有爲な人々が職を求めようとして何處の學校、會社へ行つても滿員で就職口がないと云ふのである。斯かる狀態になつて來ると人々が動々もすると神經質になつて狼狽する。此の狼狽へると云ふ事が又實に危險である。狼狽盲進してつき當つて人間の運命が開けるものではない。假令如何に外部からの壓迫多くとも、自若として我が國民は大國民たる態度を失はず、自ら內に力を充實し、廣く世界の大勢を慮つて眞に覺醒する所あれば、如何なる敵と雖も退かぬ事はない。如何なる門戶と雖も開かれぬ事はない。國民擧つて教育改善を感じて居るならば學生自ら改め、教育家自ら改新の位置に立たねばならぬ。外部から如何に制度の改善を以てしても、其の衝に當る人々が覺醒せざれば改善する事は出來ない。何れの國家でも改新は國民青年自ら覺醒して起つて居るのである。

第三は物質的及び精神的の空氣である。ベンチレーションと云ふ事は文部省でも何年か云うて居る事であるが、教師、學生が自ら身體に應用する事を知らねば何の役にも立たない。

我が國民に神經質、不消化病、其の他諸病の多い原因の一つは、酸素の供給が乏しいからである。日常住居する我が國の家は大抵晝間は開け放しである。殊に夏期は庭に多く出で、或は山や海岸に出でて充分に好い酸素をとる事が出來るが、夜寢に就く時は皆戶を堅く閉ざしてしまふ。爲に折角晝間取り入れたものも夜間に失つてしまふ事が多い。

私は七、八年前に過度の働きをなした結果、頭が疲れて不眠症に陷つた事があるが、鎌倉、箱根へ轉地しても癒らない。輕井澤に行つて始めて癒つたが、其の時の經驗によると、輕井澤

の家は始終開け放して置いたが、半日書物を續けて讀むと疲れを覺えて來る。併しそれより少し高い所の最もよく風の通る山上に出でて讀むと、朝から夜通しても少しも疲れない。夜も開け放して寢ると誠によく眠られた。

以前には外國でも夜の空氣は毒である。夜寒い風に當ると風をひくと云つたが、今日は反對な說になつて風の吹く處へ行くと血液の循環がよくなると云つて窓際へベッドを拵へるやうになつた。私が昨年ニューヨークに行つて十一月の二十七日迄居つたが彼の國の氣候は非常に寒く、少しく北部へ寄ると零度以下十七度位まで降るのであるが、米人は矢張り其の寒い所の窓際に金の網をはり風通しをよくしてそこに休むのである。

又彼の國では野外の學校を非常に奬勵する。是も學生中に呼吸器病の出來るのを防ぐ爲である。或は屋根の上に教室を造る、卽ち靑天井で教へる所等もあつた。私が輕井澤で健康を回復したのも食物許りでなく寢室の空氣を注意したからである。尤も誰も此の方法をとるのが必ずしもよいとは云はれない。自分に最も適當した方法を見出し實行するにあらざれば其の目的を達する事は出來ない。尙この酸素供給に比してより多く最も大切なる事は精神界の空氣を吸收することである。

（「家庭週報」第二百三十九號）大正二年九月

精神界の空氣

前に述べたる物質的の空氣よりも猶一層大切にして、片時も忽せにすべからざるもの、卽ち寢て居る間も起きて居る間も晝夜を問はず、人間たる以上、少しも怠つてならぬ事は精神界の空氣を吸收する事である。美術、科學、文學、宗教其の他何れにしても、此の精神界の關係に依つて出來ぬものはない。例へば前にも輕井澤の事を云うたが、見渡す限り靑天井の眞に大陸的、宇內的空氣の充ちて居る處へ行くと、一種名狀すべからざる爽快を覺える。夫れと同じく、吾々の精神修養も世界的、宇內的の空氣の中に棲まねばならぬ。卽ち宇內的、精神的に生きる事が最も大切である。

過日我が校に羅馬の一美術家から、其の著に成る「ヘンドリック・アンダソン」といふ書物を寄贈して來た。此の人は過ぐる十年間其の全力を「世界の交通の大中心創造」の計劃に集中し、之を歷史的に、文學的に、美術的に、科學的に、將た宗教的に研究して、其の理想を此の大著述に表したのである。而して是を世界各國の國王、議會其の他に分つと云ふ考で我が國へも　聖上陛下を始め奉り、兩議院、東西兩帝國大學、及び女學

校では當女子大學校へ態々贈呈し來つたのである。故に今其の書の內容の紹介を兼ねて之に關する所感をも一言して置き度いと思ふ。

アンダソンの考へでは、人類は其の目的の一致と、相互の協同によりて次第に進歩し得るものである。故に玆に大規模の一大建築によりて世界の交通の大中心點を創造し、世界人類のあらゆる精神的、智的、科學的、經濟的發明を集めて、大いに萬國平和協同の世界的基礎を築くに資せんとして居るのである。故に彼は有史以前より今日に至る迄の、各國興亡の跡を語る諸建築物の研究に力を盡して居る。過去の歷史に徵すれば、世界の進歩は次第に、より大なる焦點を中心として、其の周圍に集合しつゝ前進するものであるが、之は世が進歩するに從ひ、人の協同に對する考の廣まる事と、独立では成就し難き事を衆力によりて完成せんとする傾向を表して居る事は明らかであると云つて居る。最初の家族的孤立の有樣は次第に合して部落となり、又時を經て種族が出來、玆に其の生命、理想及び勞作の產物が保護せらるゝのである。此の野蠻的なる有樣より今日の文化の程度に至る迄、人類進歩の過程は實に一歩々々明らかに研究し得るのである。

彼のアッシリヤ時代の石碑、宮殿の壁に殘れる彫刻は、活如として其の線、其の調和の美、其の着想、技工、發明の卓越なる、實に人をして驚かざるを得ざらしむる事あるも、是は畢竟個人的の榮華、誇大、虛飾、勇氣を示すもの、卽ち其の心身の墮落の象徵たるに過ぎぬものである。

次ぎにエジプトの歷史を讀めば、幾百萬の奴隷が犧牲となりて、世界無比の大宮殿、大墳墓、三角塔、方尖碑等、文明の利器を用ひて成せる、偉大の工事に慣れたる近代人をして、猶且其の規模の遠大と其の工事の精巧なるに眩惑せしむる底の建築が成就せられて居る事が表れて居る。此の美あり、力あり、威嚴、壯嚴、備はれる建築物中に吾々は明らかに世界的一大天國を建設せんとせし人の大奮鬪史を讀む事が出來る。然れども此の中心設立の規模は人道を容るゝには餘りに小さく、人類進化の爲には餘りに狹かつたのである。故に五千年の今日、この魔力を有せしさしもの大王國も徒らにナイル河邊、荒漠たる砂漠の中に、半ば埋もれし舊趾に昔時の名殘を止むるのみである。

希臘の歷史は美を焦點とした歷史である。玆に於て初めて人生が理想的完全に達せんと奮鬪したものと見える。生命夫れ自身が神の象徵で、心身の完全なる調和發達は人の最高神聖の義務本分と信じたギリシヤ人は、美術に、文學に、哲學に、演劇に、將た體育に、人生の與へ得る種々なる種類と方面の發表に

依りて、其の内容の充實を努めたのである。此の理想的發達の人生を發表する爲には、貧富貴賤の別なく、自由に其の持てる才能も財力も貢獻したのである。

斯くしてギリシヤ人は論理的理想を創造する目的を以て、人の勞力を合同協力せしむる基礎石を置いたと言ふ事が出來る。而して其の審美的且實際的の傾向を有する彼等の理想も、其の最も高尚なる彼等の觀念の感化は、今猶人の創造的天才の中に感ずる事が出來る。

斯くギリシヤ人の大理想はアレキサンダー大王の世界的大野心を大いに覺醒し、彼をして世界併呑の大企圖を起さしめたのである。彼アレキサンダーは、諸國諸民を征服して、其の權力をわが一身に集め、以て世界の中心を造らんとしたのである。

是は單に人の創造的天才を示すのみならず、世界の發見まだ全うせられず、斯かる中心、焦點の必要もまだ切に感ぜられざる時に當りて、人心の奥底に早く、已に人類統一の願望の徵候が示されたのだと云ふ事が出來る。併し假令人の野心は一度高く天空に達する事あるも、眞なく、愛なく、義なき成功は遂に破れて永遠に跡を止めざるに至るも是非なき事である。

次ぎに起りしはシーザー大帝である。羅馬は世界統一の動機と抱負を抱きて、先づ全世界に君臨し得べき爲、世界の首都を建てんと企てたのである。故に其の目的を強め、其の權力を使用し得る爲編みたる法律は最も高尚に且廣く、能く人道に適し、世界の中心を建設すべき權利と責任を感じて起つや、萬古不朽の美術的產物を出して居る。實に羅馬の大統一は人道を益せし處も多く、且其の最も强き理想と、其の向上的精神は大いに人心を鼓舞したのである。然るに此の羅馬大帝國すら遂には瓦壞破滅の運命を免るゝ事能はざりしと云ふは、物質文明頂點に達して中に精神的動機なく、道德、地を拂うて人心全く腐敗したからである。蓋し、精神的動機のみ能く世界を統一し得る事が出來るからである。

×

さて羅馬帝國に次いで顯はれたのはキリストの建てし靈の國であつた。世界を隈なく照らすべき義と愛の新光明を放てる精神的王國であつた。假令其の建設者キリストの肉體は苦難の中に破壞せられしも、其の精神的教訓は、人誰も之を破棄する事能はざる深遠なる實體に基礎を置ける大世界であつた。此の愛と信仰と協同の精神を鼓舞せし彼の教理は、眞に人道の全體を包含したものと云ふ事が出來た。然れば世界の中心羅馬帝國倒れて後、新勢力と新威權を備へたる精神界の中心點は此處に集

つた。恰も世界を照らす眞の光は此處より照り出でて、生命を與ふる靈の泉は此處より流れ出で、愛と奉仕、勞作と正義により打ち建つべき靈の天國は永遠限りなく發達進歩して世界を統一するが如くであつた。

然るに人の私慾野心は再び此の精神國の發達を妨げた。此の眞理の光を覆ひ、此の生命の泉の流れを妨げて、世界は再び血と苦難の高價を拂うて、而も小さく區分せられた。其の間興亡極まりなく、世界の歴史は同じ事を幾度か繰り返し來つたのである。然るに今や機運は一轉して、精神的、世界的、眞の大中心が創造せられ、世界的大統一が行はれんとする徴候が顯はれて、將さに光明の世界を來らせんとする時機となつたのである。

即ち彼のヘーグに於ける萬國平和運動の如き、ブラッセルに於ける萬國的協會の如き、或は前記アンダソン氏の「世界交通の中心創造計畫」の如き、或は嘗て屢々語りし歸一協會設立の如き、又其の設立に對して世界の思想家が之に反應せし有樣の如き、又同種の會合の諸外國に既に設立せられ或は續々組織せられんとするが如き、或は嘗て米國の歸一協會を代表して渡來せられしビーバデー博士の該會に於ける働きの影響の如き、又此の度のサンダアランド氏の渡來の如く、其の目的は明後年東洋に於て開かるべき萬國自由宗教大會の準備の爲に、布哇、日本、支那、印度等を訪ふ筈であるのであるが、此の自由宗教の大會は、多分我が歸一協會主宰の許に東京に開かるゝ事になるであらうと思ふ。是が即ち今日の世界的空氣、精神的雰圍氣の働きの有樣である。吾々は斯かる空氣中に生存し、斯かる空氣を呼吸して成長せねばならぬのである。

停滯せる小さき池に住む鮒と、大海に泳ぐ大魚と、其の活力、其の勢力は如何なるものであらう。前述の如く、屋内の空氣と戸外の空氣とは、之を呼吸する人の健康力に及ぼす影響に非常に大なる差がある如く、一地方、一局部の狹溢なる限られたる思想に養はるゝ者は、此の精神的雰圍氣の世界大の大震動を靈感し、之に反應しつゝ生ける人とは大差がある。然れば吾々は此の世界的雰圍氣に呼吸し、無限に向上して眞自我を實現せねばならぬ。

（「家庭週報」第二百四十、二百四十一號）大正二月九月

歸一協會の使命

本篇は今夏成瀬校長が輕井澤に於ける基督教宣教師夏期學校の聘に應じて歸一協會の性質目的に就き英語にて講演せられた

ものを抄譯せしものなり。（文責在記者）

歸一協會生る

歸一協會は近代文明の弊風が全世界を擧げて、物質化せんとするに對して、精神的生活を高調し、其の生命を發揮するの必要を認めたる十數の學者、宗教家及び實業家達に依つて、昨年五月日本に於て初めて組織されたものである。近代文明は人生に向つて多大なる恩惠を施したと同時に、又一方には、人心を墮落せしめ、次第に精神的生活を離れて、物質的快樂を追求するに到らしめたのである。

而して今や此の荒れ果てんとする精神的生命を發揮するは、世界各國人民共同の大事業で、單に一宗教、又は一國民の任務と云ふ如きものではない。

世間往々歸一協會を目して、諸宗教の合同を企つるものゝ如く解するものあれども、之は大なる間違ひである。同協會は諸宗教の協力をこそ主張すれ、決して合同を意味し、統一を計畫するものではない。

而して宗教の目的から考へても、各宗教は各々其の特色を保存しつゝ世界各國民の精神的生命を上進せしむる共通目的の爲に働けないと云ふことはないと信ずる。否各宗教が其の目的を有効に貫かんとするには、一歩進んで積極的態度に出で、他の宗教に對しても寛容に、且之と協力する底の精神がなくてはならないと思ふのである。

歸一協會の主張する協力とは、啻に諸宗教の提携を志すのみならず、又諸國民が互に手をとり袂を聯ねんことを期するのである。

されば其の目的は所謂國民的にあらずして、萬國的であり、世界的であるが故に、此の大目的は諸國民、諸人種間の同情及び協力に依つて、始めて到達する事が出來るのである。

歸一協會と世界の先進國

斯くの如き協會の目的を果さんが爲に、余は昨夏米國に渡り、彼地の諸宗教家、教育家と會談せし結果、紐育に於て歸一協會が組織せられたのである。

而してハーバード大學の名譽校長エリオット博士は、其の協會の幹事長たる事を快諾せられ、其の他著名なる諸大學總長、教授方は皆喜んで評議員たる事を諾せられたのである。

先般米國同協會代表員として、來朝せられたるピーバテー博士の如き其の一人である。其れより余は歐洲に到り英國、佛蘭西、伊太利、獨逸等を巡歷し、到る處諸大家に面會して、同じ

く歸一協會の事を話した。併しながら之等の諸國に於ては、時間が許さないので、米國に於けるが如く、協會を組織する迄には運ばなかつたが、此の目的を達する活動に對しては充分の同情と協力とを約せられた。

小生は此の旅行の結果、歸一協會組織の精神は、潑剌として世界の諸文明國に動いて居る事を深く感じたのである。即ち、物質的文明の進歩に伴ふ種々の弊害と、難問題に對しては、今東洋が苦しんで居る通り、西洋も同じく苦しんで居るのである。

故に西洋に於ても、歸一協會に對する反響は忽ちに廣く一般的になつた。之を以ても此の運動が直ちに世界的のものである事が明瞭であると思ふ。

斯かる機に當り、小生は歸一協會の一員として、會員の抱ける希望並びに信仰の二點を諸君の前に述べて、清聽を煩はす事は、非常に喜ばしく感ずるのである。

吾が魂は、活ける神をぞ慕ふ

然り、吾等の常に祈る所は神の聖旨を行ふ事である。さて其の聖旨とは何であらう。人或は宗教の儀式や信仰箇條を墨守し、或は未來の幸福を希望しつゝ送れる生活を以て、神の聖意を行へるものと信ずる。然れども活ける神の聖旨とは果して斯くの如きものゝみの謂であらうか。否余は眞の神の聖旨とは、啻に之のみならで、一層動的大傾向を云ふのであると思ふのである。即ちオイケンの所謂歴史、社會、人心を通じて現れて居る精神的生命の進化、識界の千狀萬態の裡に顯現せる進歩的自發力、即ち精神的生命の持續である。又人生に深く根ざせる神の生命である。

然らば吾人は何處に神の聖意を讀み、神の默示たる時の休徵（しるし）を認むべきであらうか、吾人は神性を備へたる人生に於て、初めて之を見ることが出來ると思ふ。

キリストも嘗て、神の像なる人は眞の靈性に依りて精神的境遇に反響し、直覺的に神を知り、又靈と眞とを以て之を拜する事が出來る、と敎へられたが、世界の學者、思想家も亦等しくかく敎へて居るのである。

然らば現代に於ける時の休徵とは何であらうか。

萬國的精神の發現

個人的心意又は、國民的精神と云ふ語は久しく吾人の聽く所、此の精神に支配せられ、指導せられて、各國民は各々理想を進めて來た。地球も之に依つて分たれ、海陸も之に依つて按

配され、人民も之に依つて權力增進を計畫し、領土擴張に熱中して來たのである。

「若し人、全世界を得るとも、眞の生命を失はゞ、何の益あらむや」

然るに人間本來の性質は、斯くの如き區分、卽ち國土の境界線、人種の區別などに依りて限られ、支配せらるゝものではない。

故に今や人間衷心の要求は、凡て之等のものを超越して、各國相互の利益を圖り、萬國的精神を發現せんとして居るのである。然り全世界の人心は、人類的同情の下に一大焦點を作らんとして居るのである。

されば今囘の歸一協會の運動に對しても、歐米諸國の思想界が多大の反響を現はした事は、已に前に述べた通り驚くべき程であつた。之に對する諸大家の意見は、歸一協會英語報告書に掲載してある。

斯かる運動は、啻に我々同志の間に於てのみ起つたものではなく、既に佛國に於ても、此の種の運動が始まつて居る。

バトラー、コロンビア大學總長の、余に送られた書面の一節に、「佛國に於ては、數年前より男爵デストラネール・デ・カンスタン氏の主唱に依つて、貴君の主張せらるゝ歸一協會と同一の目的を有する一團體、卽ち萬國協和會と稱するもの組織せられ居り候、（中略）獨逸にも右の有力なる支部設立せられ、又米國に於ける同協會員は、既に七萬以上に達して益々發展の勢を示し居り候。其の他既に大英國、亞爾然丁、合衆國、西班牙、伊太利、墺太利等に於ても、同支部設立中に有之候」とあり、又同男爵より小生宛の文中にも、左の句がある。

「戰爭の前には、仲裁裁判あれども、仲裁裁判の前には協和なかるべからず、又協和の前には歸一なかるべからざるものと存じ候。實に是ぞ今日諸先進國の善意有る國民が正に踏むべき思想進歩の階段に御座候」

かゝる事實は吾等と相知らずして、而も同一目的を計畫し、眞の効果を收めつゝある人々が、他にも多い事を證明するものである。又羅馬には、ヘンデリック・アンダソンとて、世界交通の一大中心を創造せんがため、過去十年間全力を注いで居る人もある。斯く云へば之等は、皆偶發せる暗合なりと云ふ人もあらんかなれど、決して偶發でもなければ、又奇蹟でもなく、眞に萬國的精神の生るべき機が熟した休徵とも見るべきものであらう。ウイスカンシン大學のロス博士に面會の節、博士は「三年前には歸一運動は不可能の事であつたが、今日となつては單に可能なるのみならず大いに熱望すべき一運動だ」と云は

れた。

實に世は凡て、戰亂の野蠻的にして、且利益なきに飽きはてた。而してアンダソン氏の云へるが如く、「今や人道は世界の進歩が、人類改善の爲にあらゆる人間の勢力を集注するにあることを信じ、眼を刮し耳を欹て、此の統一的生命の旋律的鼓動を聞かんとして居るのである。」

物質主義に對する精神主義の勝利

十九世紀は科學と物質主義の世紀であつた。科學上の發明に依つて、時間と空間の大征服は全うせられた。蒸氣力と電氣力とは從來人類を限界し、進歩を遲からしめた、地理上の障碍物を除去した。印刷機の完成は知識を普及し、諸機械の發明は工業界を革新して非常に世界の富を增加し、一般人民に新しき希望を與へ、大いに向上的精神を鼓舞した。其の新發見の學理應用の迅速なる事は、到底人をして其の際限を知らざらしむる程である。それ故に五十年前には、若し社會が科學者の手に依つて動かさるゝならば、完全なる域に達するであらうと迄思はれた。併し此の間に極端なる物質主義は社會より其の生命、精神、活力を悉く奪ひ去り、之が爲に宗教、文學、美術、法律、政治、教育、其の他凡ての制度は虛しき形式、死せる機械と化し去つたのである。是卽ち今日世界の社會的困難の原因である。併し人間は決して斯くの如き乾燥無味の生活に滿足し能ふものではない。何か高き聖き靈感を受けて、生命の源泉に渴を癒さん事を要求するものである。現に我が儘の國土、不幸なる家庭、不正なる財力の束縛より救ひを求むる叫びは高く且痛切である。此の悲しき哀訴に應じて、世界到る處の宗教家、哲學者、社會改良者、其の他のあらゆる思想家は皆一齊に立つて精神主義を唱へ、物質主義を排し、精神的王國を來らしむるに汲々として努力して居るのである。

東西文明の調和

世界文明の二大潮流は共に源を中央亞細亞に發して居るが、其の一は東洋諸國を流れて東漸し今や日本に於て進歩の絕頂に達せんとして居る。他の一は西流して歐洲諸國を經て大西洋を越え米國に渡り、西漸將さに太平洋岸に達せんとして居る。異種の分科は進化の法則である。進歩のある處には異種異樣もあるべき筈である。境遇を異にし事情を異にして發達せし人類進歩の二傾向たる東西の文明に、顯著なる差異のあるのも勢ひ免れざる事である。

希臘羅馬の文明と傳說とを背景とした西洋文明は自然に學術

的であり、物質的であり、個人的であり、進歩的である。之に反して印度、支那の文物、思想の影響を受けた東洋文明の特徴は形而上學的であり、思辨的であり、克己的であり、保守的である。然るに今東西兩文明の調和を圖るに際し、斯く數千年間極端に向つて發達せし傾向の特徴が、果して俄かに融和せられ、合一せられ得るであらうか。否是は非常の難事である。然しながら兩文明の調和とは決して、是等傾向を變革し、其の特質を無視し、以て中和を計らんとするの意味ではない。是等種々の發達の結果は皆、人世の内容を充實せしむるに大切なる要素として保存すべきものである。要は互に相理解し、相攝容するにあるのである。即ち活潑にして、精力的、進歩的、人格的なる歐米人の要素と、勇敢、端嚴、物に動ぜざる保守的、絶對的なる東洋風とが東西人士の胸中に能く了解せられ彼我の長短互に相補足せらるゝに至つたならば人道は必ずや一段の幸福を增すに相違はないのである。

今や太平洋は東西兩勢力が政治上、商工業上相會見せんとする場所となつた。支那の覺醒、パナマの開通は近き將來に開かるべき一活劇の序幕である。而して此の會見たるや、果して友誼的握手であらうか。將た又敵愾的衝突であらうか。此の問題は世界各國の大いに注目して居る所である。斯かる場合に於ける吾人の最大急務は太平洋に蟠まれる思想感情の融和、友誼的會見の準備である。一旦此の兩者間に好意的精神の結合全うせられんか、餘は皆之に準じて容易に調和し得る事は明らかである。然らば此の一事は決して忽せにすべからざる神の使命である。

世界宗教の歸一

諸宗教の歸一、協力の必要は近頃に至つて切に感ぜらるゝ樣になつた。從來各宗派の同盟、キリスト教團内の兄弟主義のみは主張せられ、また幾分か實行せられしも、世界の各宗教協同の計畫は未だ嘗て行はれなかつた。世界の宗教と云へば佛教、ブラマ教、儒教、ユダヤ教、マホメット教、印度教、ゾロアスター教之に加ふるに基督教の百三十七宗派があつて、其の教理、信仰、儀式等相距る事遠く、互に相容るゝの餘地なく、況して相互の特徴を發揮して、長短相補足するが如き事は夢想だもなし得なかつた事である。然るに近代に至り、凡ての宗教の眞髄は一なりと云ふ事が次第に認められて來たのである。比較宗教學は正義、誠實、感恩、奉仕、同情、慈悲、愛と云へるが如き根本的道義心、又驚嘆、敬畏、敬虔、崇拜、希望、向上的精神の如き、人をして靈感を覺醒せしむる要素は、皆何れの宗

教にも共通なものであることを證明して居る。而して又氣候、風土、境遇、遺傳、人種の差異等が是等同一原理、根本的宗教感情の表現に種々の色彩を附し、以て今日の如く多くの宗派の起源をなすに至つた事を示して居る。故に現代の大思想家の中には歴史、傳說、習慣よりも精神的自由を尊び、宗門、宗派、民族、人種等の區別を超越して、壯嚴なる精神的天地に翺翔する、宇内的宗教の出顯難きにあらずとの思想を抱いて居る人さへもある。

誠に世界の二大宗教として最も反對の傾向を顯し來りし耶、佛二教に就いて見るも、近來大いに相接近する狀を示して來た。佛教が耶教の感化を受けた事は多大であるが、東亞の光が歐洲の人心を照らした事も亦少くはない。近代哲學、心理學は直覺說、主意說に傾いて居るが、此の思想は抑も何處から來たものであらう。ショウペンハウエルが此の思想の發言者と云ふのは西洋に於ての事であつて、此の思想は彼より遙か以前に業（マヽ）に既に佛教に胚胎せられて居る。又「内在的神」とか「神の内在」と云ふ考も同じく佛教の教ふる所である。其の他近來世人の多く口にし、且心靈研究の興味の中心點となつて居る精神說も同じく同宗教の古くより說いて居る所である。然らば斯く世界宗教の大潮流が今向はんとし進まんとする、最大中心とは果して何であらう。是卽ち神の完全である。キリスト教の所謂眞の生命の神である。佛教の所謂佛の生命、全體意志、大我と小我の融合である。又哲學の所謂無限、絕對、實體であり、儒教の所謂天の道である。然り此の神は生命であり、活動であり、創造であり、進步であり、進化である。昔時イスラエルの詩人は此の神、此の生命の潮流をかく讃美して居る。

「山また成り出でず、爾また地と世界とを造り給はざりし先より、永遠より永遠まで爾は神なり」

斯く論じて來ると、一宗教の歴史、習慣、特徵の如きものは、其の宗教に取りては重要なるものに相違ないが、是が其の宗教の總てではない。否却つて其の種々の形式の奥に尙大切なものゝある事が解るのである。故に何宗たるを問はず、凡て信徒たるものは外部の形式、習慣等に捉はるゝ事なく、先づ凡ての宗教の根本たる活ける神聖原理、卽ち此の凡てに共通なる神を認めなければならぬのである。

然るに嘗てはキリスト教を傳ふるには、他宗教、他國民の歴史習慣等は皆打破せねばならぬ、凡て新教理と異なるものは皆異端である、故に悔ひ改むるとは其の心底より基督教以外の思想、感情、信仰を悉皆除去せねばならぬ、と思はれた時代もあつた。此の時代には、神の忠僕とは教會に於て限定せられた教

理、儀式に一切忠實に服從し、信仰箇條を金科玉條として遵奉すべきものと思はれた。

故に他宗門、他宗派に對して寛容なる態度をとる事は一の罪惡であつた。少くとも不忠の行為であつた。斯くして愛の宗教が福音傳播のために流した血潮の量は世界凡ての戰爭が流せしものよりも遙かに多くなつたのである。キリストは此の生命の大潮流を觀察し、其の時代の精神に觸れ、世界の大傾向を認めて萬民救濟の福音を述べ、生ける神と共に、この神の大事を行うたのであるが、一方彼を迫害せるものは習慣的信仰のために眞理の光を觀る能はず、宗教の形骸にのみ拘泥して、新奇なるものは皆異端として之を排斥せし結果、終に十字架上の磔殺を見るに至つたのである。

ルーテルの迫害も同じく明暗二種の戰爭であるといふ事が出來る。

歸一協會の主張

歸一協會の主張する處は、世界各國民の注意を引いて此の一大事實を認めしめ、彼等をして吾人と共に、時代の精神、現世界の傾向の默示に從ひ、世の救濟のために神と共に協同せしめんとするのである。

而して歸一とは卽ち此の神、この生命、この實體なる大潮流と一に歸する事である。而してこの生命の潮流は永久である、悠遠である。吾人歸一協會々員は單に之を感じたのみである。之を認めて而して其の流れに自分を投じたに過ぎない。而してこの歸一協會はこの天の召に應じて起り世界救濟の大理想を實現せんために生れ出たに過ぎないのである。此の眞理は明瞭である。又歩むべき道も自然である。然るに如何なれば、我等はこの大目的を成就するために人の意見に對して寛容に、他の長所を認めては之を喜ぶ能はざるか、多くの特質を調和して眞に神に於て人と協同する能はざるか、何が故に其の事のかく困難であるであらうか、其の心は常に神の愛によりて最も溫かく、又上よりの光によつて最もよく照らされてあるべき筈であるのに、我等神の僕は何が故に卑劣なる人種的偏見や、狹隘なる思想や、不穩なる感情に捉はれて、神に對して一大障壁を築き、斯かる大運動に對してすら見る能はず、心感ずる能はざるのであらうか。然らば我等は眞に謙遜つて大いに自省し、世界の眞相實情を觀破し得んがために、吾人の眼より鱗の取り除かれん事を祈るべきではあるまいか。

世界の現狀

今より暫時世界の現狀態を研究して見たいと思ふ。

先づ今日のキリスト教團は果してキリストの教に適ふ行動をなして居るであらうか。唯單に口にキリスト教信徒なりといふも、其の行為が之に反するならば、其の人の信仰は死んで居るのである。眼をあげて太平洋の彼岸を眺むれば、我が同胞は加州に於て、同化し難き一國民とて排斥されて居るが、其の實は假令彼等が同化せんとしても同化し得らるべき凡ての機會と境遇を與へざるにあるのだと、ボルト氏はいうて居る。

是果して眞の兄弟主義の發表であらうか。米國が若し昔時の如く、我が國に對して友誼關係に立つて居るならば、其の輿論は嘗て幼若なりし日本を指導するに、寛仁大度を示して其の至誠に感泣せしめし如くに、今も尙成長せし日本と握手し、かつ今日の排日政策に替うるに、先進國として後進國なる我を導き、我が世界に對する一大天職を彼と共に全うし得ん為に、助言の勞を厭はないのであらう。併し玆に吾人をして大いに意を强うせしむる一事は、米國に於ける日本の知己朋友が乏しくない事である。殊に先般渡來せられしビーバデー教授、メービー博士、ジヨルダン總長の如き、其の他歸一協會々員の如き、共に與に熱誠以て日米間の此の難問解決に盡瘁せられて居るのである。單に兩國に對して公平なるのみならず、人道に滿足を與へんが爲に盡力せられて居る事は吾人の感謝に堪へざる處である。

人は世界の理想は平和であると云ひ、皆、平和の御國を來らせ給へ、と祈つて居る。然れども今日世界の各國が、其の國民の體力、智力、財力を擧げて集注して居る處のものは何であるか、曰く戰爭である。軍備のために卽ち人命を損ひ、社會を破壞し、他人の領土を奪はんがために、全世界は平和の今日に於てすら、年々七十餘億圓の巨額を消費して居る。又最近の發明なる飛行機も最初は軍事用に供せられんとして居るのである。斯かる狀態にて人間社會は戰亂、單に守備的のみならず侵略的戰亂のために熱狂して居るといふも敢へて過言ではあるまい。

斯く巨億の財が空しく破壞的目的のために浪費せらるゝ間は、社會は到底貧苦と罪惡の淵より浮び出ることは出來ぬのである。

「嗚呼何故に金の價は斯くも高く、人の血と肉の價は斯くも安きか」

とは貧民の歎聲であるが、其の高價なる金は軍用のためとて水中にも放擲せられ、空中にも爆發せられて居るのである。僅々五分間の海軍實彈射擊に實に十萬圓といふ巨額が煙になるといふではないか。假にこの軍備費を貧民救助の事業に用ふるとす

れば如何。彼等の生活狀態は如何に改善せられ、彼等の艱難辛苦は如何に輕減せらるゝであらうか。然れども國家的强弱の度が軍備の完不完如何によりて量らるゝ現代に於ては、斯かる事は到底未だ行はるべしとは思へぬのである。

然れども弱肉强食は決して眞文明の現象でもなく、又世界一般の理想でもない。唯其の理想は高きがために行爲が之に伴はないのを歎ずるのみである。

されば萬國平和協會の如きも極力之がために盡瘁して居るが、此の平和協會は主として各國民間の經濟的政治的問題、卽ち物質的方面の問題を取扱うて居るに過ぎない。然れども吾人の、否世界の大理想を實現するには、尙他の一方面、卽ち精神的方面を改善する事が一層必要である。而してこの方面に活動すべき人は何れに求むべきであらうか。

昔時は一個人一社會を救はんと思へば其の個人、其の社會を悔改めに導けば事は足りた時代もあつたが、世界が一大團結と變じつゝある今日に於ては、一個人の救ひも社會的世界的にせねばならぬのである。例へば世界各國の間に正當なる精神的關係が成り立ち、眞の平和的、調和的好意の精神が出來て來なければ、各國間の困難、罪惡を救ふことは出來ない。故に僅に一貧民の救濟さへ各國民の世界的精神の協力がなければ行はれぬといふ有樣である。

相互の補助は社會國家進步の原則である。財政上の貴族政治は、軍事上政治上の貴族政治と同樣危險である。然るに今世界の富は小數富豪の掌中に歸し、自餘の民衆は皆貧苦と破滅の谷底に追ひやられつゝあるのである。列國の經濟的關係も同樣である。而してこの蓄積せられたる富の結果は際限なき奢侈、淫佚、驕奢となつて居る。

而して利己心、私慾心は肆に富める儒夫の心を支配して居るのである。

是が卽ち現今社會の眞の狀態である。實にすべての被造物は今に至る迄共に歎き共に苦勞して居る。

救濟を求むる聲は絕間なく響いて居る。この苦痛より人を救ひ、社會を救ひ、世界を救ひ出すことが神の事業である。而してこの事業は必ず成就せらるべきものである。然り完全なる社會、黃金時代卽ち神の天國は必ず來るべきものである。

然るに「我等の信仰若し行ひを兼ねざる時は卽ち死ぬるなり」儀式によりて神を尊び、唇のみで神を崇むるとも神は決して之を悅び給はぬ。眞に神の喜び給ふものは神の聖意の行はれんことである。聖き熱誠によつて其の目的が成就せらるゝ事である。

久遠なる生命の潮流

吾人の行ふべき大目的は茲にあり、之が卽ち久遠なる生命の潮流である。時代の精神である。世界の傾向である。宇内の理想である。根本の眞理である。換言すれば之が卽ち神の聖意であり、神の事業である。この召に應ずるのが宗教であり、之を信ずるのが信仰であり、之を行ふのが神の聖意である。

諸君、余は嘗て此の幻像を觀たのである。故に余はこの事のために立たんと決して自ら此の生命の潮流に投じたのである。而して今斯く諸君と相見るに至つたのである。

諸君、余は信ず、世は必ずこの大理想に一致歸一すべきものなることを、而して神の天國は斯くの如くにして必ず來るべき事を、然り余は是を信じて疑はざるものである。

（「櫻楓會通信」第四十四號）大正二年十月

今秋の運動會

本校に於ても秋季運動會を催す時日が愈々接近して來たが、遂行すると定まつた以上は、何處迄も一同が滿足するやうに遣り切らねばならぬ。いゝ加減に止めて置くと云ふ事は宜しくない。運動會の目的はもと〳〵外部の發展卽ち技術を練る事のみが主ではなく、之により內的生活を大いに充實せなければならぬのであるから、よく熟慮し最良の方法を取らねばならぬ。

其處で先づ運動會に就いて最も考へねばならぬ事が二つある。其の一はアート—藝術—文藝—趣味の發展と云ふことである。アートは實に品性の眞價を表す處のもので、此の表れが人生の價値美である。第二は科學—哲學—智の方面で、思想を構成すると云ふ事である。此の二つは共に離るべからざる關係のもので、此の兩方面を最も有効に働かす事が大切である。

運動會の如きも一種のアートで、思想、感情を表す方であるが、夫れを最もよく表はすには、其の前に充分に考ふると云ふ事、眞理を味ひ、思想を構成する事が大切である。所で智の方面に深くなるにも、自我發表を成熟さするにも、其の動機—力—動力に生命を與ふる處のものは、第一本氣になる、熱心になる、自己を捧げると云ふ事である。之等の語が最もよく其の意味を考へさする處のもので、其處に教育の目的修養の意義がある。而して其の深い處の態度を養ふ事が最も大切で、之が學問の動機であり、アートの眞髓である。然らば第一に吾等の根底より動く力は何か。其は眞理を追究する事である。大悟徹底したいと云ふ希望も、學問を續け度いと云ふ向上心も皆其の根底

は眞理の追究である。人間は無限に好奇心を持つて居る。進む程向上して行き度い、學者になる程知識欲が盛んになる。而して眞理が解り、實相を見、光に照らされると云ふ時に、之に伴つて深い感情が湧き出で、崇高の念が起り、敬慕、愛信の情が起るのである。此の情は自我を實現する動力で、此の情操の表れが藝術、宗教、詩、歌である。

又眞理を追求する根本要求は自分が愛する目的物即ち理想的な目的物を探すので、此の目的物に遭遇した時が大悟徹底である。之により徹底した我は遂に大我になり、自己を理想の目的物に捧げてしまう。自己は己にあらずして大なる無限な壯大な價値ある高調の生活に入るのである。之が眞のエキスプレッシヨンである。之が即ちアートであり、ハーモニー、美の發揮、生の高調である。さればアートはその價値を自身に利用するものではない。利益の問題でもなければ、人より賞讃されるのが目的でもない。只其の物それ自身の價値で、之を增進する事が教育の根本である。故にアートを錬るならば、其の妙所に達する所まで行かねばならぬ。

運動會は校風を作る所の團體的共同的リズムである。大合奏である。數萬の特色が大きな音樂に組み立てられ、千差萬別の特色が一の大なるものに調和せられて大合奏を行ふのであるから、それには各自々々の態度が大切である。本氣になり、全體の空氣に應じて自我を發揮する處の反應あるものでなくてはならぬ。斯かる深い美術の經驗が味はれて始めて多くの人によい感化を與ふる事が出來るのである。即ち團體として共同の出來る態度、氣分が出來ねばならぬ。我が國人は一般に此の品性に乏しい。殊に婦人に多く缺けて居ると思ふ。されば其の弊を打破し、社會的の品性を養ふ事は運動會の目的であり、又教育の目的であるが、其の教育に就いての誤解が種々あると云ふ事も考へて置かねばならぬ。

最近彼の東北大學に女子の入學を許した事の如き、外國が嘗て男子の學校に女子の入學を許可する時の大問題であつたに比較して、非常に容易く通過した事は人々の知る通りであるが、之等を見ると女子教育は非常に進んで來たやうに思はれる。併し其の實更に進んで居ない。相當の地位あり考ある人の間にもまだ、「女子に高等の教育を與ふる事は宜しくない、教育は却つて女子を不幸にし、日本の家庭を破るものである」と云つて居る人も少くない。然れども我が國人をして眞に團體的共同的の道德を發達せしむるには勢ひ教育の力によつて養はねばならぬ。

西洋にはデイスインタレステッドと云ふ言葉があるが、實に

彼の國に於て團體の目的に成効した人は何れも皆デイスインタレステッドの態度卽ち自己の利益を放れ、己の地位名譽を忘れ得た人である。

更に運動會に就いて注意すべき事は全校生徒のこの態度である。幾千人の人々を招きて相共に大音樂を合奏するので、其處に美しき團體的の空氣を生み出す事は偏に生徒自身の力にあるのである。自ら描くのみならず觀衆をして悉く其の合奏に加はり、その氣分空氣を感ぜしむる樣にせねばならぬ。過日或處で體育に就いての話が出た時、女子に體操を奬勵する事は問題である。近來其の結果女子の體軀が非常に不體裁になり困る、と云つて居る人があつた。又或人は此の頃運動會と云ふ事は流行するであらうかどうであらうなどゝ云つて居つた人もあつた。吾等は自分の確信する事を遂行して行くのであるが、又世の中の潮流に就いても或程度迄は考へねばならぬ。餘りかけ放れぬやう度合を考へ、また西洋の長所は採るが善いが、似非者流な處のなき樣に注意せねばならぬと思ふ。

（「家庭週報」第二百四十四號）大正二年十月

至誠以て佳節を祝せよ

大正の改元後天長節祝賀の式を擧ぐるのは今日が最初である。余は滿腔の誠意を表して六千萬同胞と共に謹みて、聖壽の萬歳と寶祚の無窮を祈り奉るのである。昨年は諒闇の天地愁雲漠々、盡きせぬ哀愁の中に、御儀式も行はせられざりしが、今年は、宮廷に於ても賀筵を催させられ、全國の赤子も抃舞雀躍して、祝意を表することを得るは欣喜措く能はざるところである。余は今此の佳節に際會して、皇室の御繁榮を祈り國家の前途を祝するに當り恭しく　陛下の御聖德を仰ぎ、深く聖旨の存するところを恐察し奉りて、我々臣民が當さに盡くすべき道を考へ、赤心忠誠を勵むは、祝賀の微衷を捧ぐる所以であることを切に感ずるのである。陛下が御聰明にして御仁德に富ませ給ふ事は、夙に洽く六千萬赤子の瞻仰景慕し奉るところであつて、多くの活模範を垂れさせられて居る。殊に人民を親しませられ愛撫の心を注がせらるゝことの深きは、我々の最も感激にたへぬところで、人民が眞に赤子の如く皇室に心を寄せて、慕ひ敬ひ奉るも固よりの事である。　陛下が夙に下情に通じさせ給うて、屢々御側に奉仕せる侍臣等を驚かせ給ふことあるとい

ふことを、洩れ承つて居るのであるが、是れ畢竟御慈愛に富ませらるゝ御仁德の然らしむるところである。　陛下は御幼時に於ては學習院に御降學あらせられ、多くの臣下の子弟に交らせられて學業を勤しみ給ひ、御見學としては僻陬の邊地迄も行啓ありて、南は九州の端より北は北海道の果まで、玉跡を印し給ひ、嘗ては朝鮮をも御巡遊あり、至る處民情の御視察は素より、常に其の地の教育や產業を御奬勵遊ばされ、又御避寒御避暑の折柄などには、或は御遊獵の爲山河を跋涉あらせられ御散策には田園の間を逍遙あらせられ、或は附近の村落に御微行あらせられ山樵獵夫にも御言葉を交はされ、田父野人とも御物語りありて、下々の生活の狀態や、人情の機微をも御熟知になつていらせられる。濶達にして平明質素なる御性情は、自ら其の間に無限の感化を御與へ遊ばされて居る。最近の御事としては、今夏日光御避暑中俄かの思召し立にて、古河氏の足尾銅山に行幸あり、親しく工夫の勞働を御覽はせ、其の辛苦を恤み、產業を勵まし給ひ、皇后陛下にも續いて同所に行啓ありて、同じく其の實況を御覽になつたと承はる。昨年東宮殿下の御時早稻田大學に行啓あり、妃殿下には我が女子大學に行啓ありて、親しく學事の御奬勵を賜はりたるは、我々が無上の光榮として感激して居る處である。私立學校に行啓ありたるは、全く異例の事に屬し、之を上下隔絕、天子を拜すれば、目が潰れるといはれて居つた時代の事に顧みれば、眞に今昔の感にたへないので、轉た感泣の外はないのである。

かくの如く赤子を愛撫し給ふ明天子を戴く我々臣民の慶福は、我々祖先の未だ嘗て有せざりしところの慶福である。我々は如何にして此の御仁德に酬ゆる事が出來るであらうか。如何にし忠誠の道を勵むべきか。深く〳〵省みるところがなければならぬのである。我々が、陛下の御仁德に報い奉る道は他なし、能く其の聖旨のあるところを拜察して、之を奉體し全心全力を盡し、奉公の誠を致すに在るのである。

御踐祚の勅語は炳乎として聖旨を御示しになつて居る。曰く「先帝ノ遺業ヲ失墜セザランコトヲ期ス」曰く「臣民亦和衷協同シテ忠誠ヲ致スベシ」此の二語は我々臣民の服膺して一日も忘れてならぬ御言葉である。卽ち　陛下には、先帝の遺し給へる御偉業を繼承せられたるに就いては之を失墜することなく益々恢弘せんことを期し給ひ、汝臣民も一致協同其の聖謨を翼賛せよとの御趣意である。

先帝陛下が中興の英主として、國步艱難、內外多端の際に御位に卽かせられ、王政復古の大業を成就せられ、開國進取の國是を定め給ひて、庶政を更新し、舊來の陋習を破り、知識を世

界に求め、終始國運の發展を御軫念あらせられ、遂に今日の隆運を開かせらるゝに至りたるは、眞に絶大なる御偉業であつて、嘗ては世界の歴史に關係なき渺たる東洋の一孤島として、歐米各國より藐視せられて居つた我が帝國が、僅々半世紀の間に於て蔚然として勃興し、國威宇内に輝きて、今や列强をして畏敬せしむるに至つたのはこれ全く　先帝陛下の御威德によるのである。

然しながら世界の進歩は駸々として一日も止らず、我が國の進歩は外國人をして殆ど奇蹟の如く感ぜしむる長足の進歩であるにも拘はらず、猶百事其の行程の半ばに在つて、更に之を展開し、充實せしめなければ世界の進運に伴ふことのできぬのは、掩ふべからざる事實である。明治の進歩を更に勢ひを加へて進歩せしむるは、大正治下の國民の責務であつて、今は決して油斷の出來ぬ大切な時機である。然るに明治の發展餘りに急激にして、世界の驚嘆を博したるが爲に、人心稍々倦怠驕慢に流れ、退嬰保守の氣風を生ずるに至つたのは、憂ふべき傾向といはねばならぬ。我が國の進歩は之を維新前、鎖國時代に比すれば、凡て面目を一新して殆ど舊態を認めず、眞に隔世の感があるのであるが、之を歐米各國の進歩に較ぶれば、優るところは何處に在るか、誇る處は何であるか。少しく眞面目に考へて見る時は、我が國が未だ歐米列强を凌駕する境に達して居らぬことは、殘念ながら否定することができぬのである。之を以て決して悲觀し失望するのではないが、尙大いに奮進し努力して、少しも心を弛め力を弛めてはならぬ。

陛下が先帝の御遺業を恢弘せしめ給ふところの聖旨もこゝに存することは疑ひなき事である。陛下には臣民が皆一致協力して此の奮鬪を續け、偉大なる明治の發展をして更に大正の新時代に開展せしめん事を望ませ給ふのである。我々臣民が若し此の覺悟を缺いたならば所謂獨り天子をして社稷を憂へしめ奉るわけで、我々を赤子の如く愛撫し給ふ御仁德に對し、何とも恐懼の外はないのである。

「今は眠より醒むべき時なり」との哲言は、今日の時機に當り大正新時代の劈頭に於て、我が國民に對する最も痛切なる警告である。かゝる時代に遭遇せる我が女子諸君、國家の事は獨り男子の手にのみ委ねて安んじて居ることを得るであらうか、決してさうではない。國家の一半を組織せる女子の勢力が、國家の興隆に關することの大なるは自然の道理であつて、一國の文明の程度を知らんとせば、先づその女子を見よとは、世界の文明を研究せるものゝ齊しく信ずる所である。かゝる重大にして緊密なる關係を有するところの女子にして、毫も國家に奉仕

する觀念なく自己の營むところの生活が事大小となく國家社會の進歩發展に關はつて居る所以を悟らずして、只浮か浮かと生活して居つたならば、國家社會の進歩改善は到底望まれないのである。女子教育が明治の御世に著しく振興して、今日の進歩を見るに至りたるに拘らず其の教育たるや、多くは外部の刺戟によりて促進せられたるものであつた爲、舊來の境遇に馴致せられ、久しき因襲に浸潤せられたる餘弊を脱することができず、女子自ら内より動きて自己を高め進むる獨立の精神に乏しきは、余の常に憂へて居るところである。

徒らに外形の文明に眩惑して虚榮に囚はれ、浮華驕奢物質的の要求を滿足せしめ、之を以て無上の幸福と感じ、只管其の境遇に迎合依頼して醉生夢死の生活に安んじて居つては、何れの日にか女子の位地を高むる事が出來るであらうか。而して今日の女子には實にかゝる狀態に在るものが多いのである。此の狀態より脱する事が出來ないならば到底先帝の御遺業を恢弘せしめ給はんとの聖旨に副ひ奉ることは望まれないのである。臣民の和衷協同は獨り、男子のみの事ではない。女子も亦心を合せ、志を一にして國家に奉仕し貢献して、以て聖意を安んじ奉らねばならぬのである。「眠より醒むるは」殊に今日の我が女子に與へられたる痛切なる警句ではあるまいか。

余は今日の佳節に際し、　陛下の深甚なる御仁德に報い奉るには、此の精神を養ふ事が極めて大切なりと信ずるのである。

（「家庭週報」第二百四十五號・天長節祝日式辭）

大正二年十月

今後の使命

明治の維新は畏くも　先帝陛下御登遐の御始め、國事多端なる時に當り、彼の王政復古の偉業を成就せさせられ、開國進取の國是を定めさせられて爾來幾多の艱難を經、五千萬の蒼生を感化御指導あらせられた御事は、常に國民が感拜し奉ると申すも畏れ多い次第である。斯くて進んで止む事を知らざるが如き明治の治世は、昨明治四十五年に至つて、不圖も先帝の御不例に遇ひ然して俄に諒闇の悲しき天地となつた。國民は殆んど茫然爲す所を知らず、國論も國力も凡て唯過去の事を追想して、將さに第二の維新に向つて爲すべき使命をも失ひたるかの如き意氣銷沈の狀態となつた。或一部の人をして「日本の隆運は明治が其の極度であつた」とさへ云はしむるに至つたのは悲しむべき事である。

されど徐に我が大正の大御代に於かせらるゝ　今上陛下御踐

祚の詔勅を拜承し奉れば「先帝ノ遺業ヲ失墜セザラン事ヲ期ス」と仰せられた。吾等國民は徒らに過去を追うて哀悼の心唯それのみに止つて居るべき時ではない。此の國是を示し給はりたる　今帝陛下の御意志に添ひ奉るべき勇氣を奮ひ起さなければならぬ。明治は實に今後の我が大日本帝國の使命を完うする所の準備時代であつた。其の大目的の爲には時に殺伐の氣に滿ち、屢々戰爭を重ねる事も止むを得なかつた事であつて、是れが爲には擧國一致正に正義の爲めに戰つた。然れどもこれは畏くも　先帝陛下の御意志ではあらせられなかつた。明治の御代は未だ先帝陛下御意志の全く行はせられたる極致ではあらせられなかつた事を、恐察し奉るのである。

斯かる意味に依つて吾々は、明治の御代を第一維新とすれば、來るべき大正の御代は其の御遺業をつぎて將さに爲すべき第二維新と申さなければならぬ。然して第二維新の困難にして、且つ前途遼遠なることを思ふのである。明治四十五年間に於て、漸く藩閥と國民の隔ては取り去られた。けれども之に代りて新に官、民の隔て、學閥の爭ひ、擧げ來れば益々多事である。何人か日本の文明は明治の御代に於て花も咲き、實も成つたと云ふ事が出來やう。これは全く皮相の觀で、未だ我が國は決して世界を凌駕し、又西洋諸國と相對し得る程の事業を成就したとは云はれない。漸く今日世界に國家として認められたと云ふに過ぎないのである。之を內に顧みれば、前述の如く、漸く士農工商の階級はとれたが、まだ官民の間にある城壁はとれない。國民の權利、價値はすべて官にあつて、民は何等の權利、位置も認められて居ない。只此の一事を以ても決して我が國民は憲法的國民となつたと云ふことは出來ない。

斯くの如く內外を省みると、我が國は物質的にも精神的にも決して滿足する事は出來ないのである。

されば　今上陛下が先帝の御遺志を繼承遊ばさるゝに當つて、唯現狀維持を以て御滿足遊ばすのでないと云ふ事は申す迄もない事である。此の　陛下の思召に對して吾々は現に存命せらるゝ各元老達の少壯時代に明治復興を以て任ぜられたと同樣の元氣を以て、又今後の我が帝國の大使命を分擔して進むと云ふ決心を致さねばならぬ。殊に吾々は臣民と云ふ意味を今日一層深く考へねばならぬ。臣とは今日まで多く官と云ふ意味であつて、動々もすれば民は度外視されて居つた傾きがあるが、決して高きも卑しきも、年寄りも若きも、男子も女子も、其の間に等差のあるべきものではない。又今までの臣民と云ふ中には女子と云ふ事が餘り意味せられて居なかつたやうである。卽ち官尊民卑に於ける如く男尊女卑であつて、人間の權利幸福はす

べて男子にあつて、女子は唯男子の道具として提供せらるゝに過ぎなかつたのであるが、此の大正の御代は寧ろ女子の時代、婦人、子供の世紀である。併し西洋の或一部の誤つた思想の樣に、其の權利を得、位置を高むる爲めに男子に向つて戰ふと云ふことではない。官民和衷共同し、男女相互に扶助して、而して各々其の間に責任を分擔しなければならぬと云ふのである。又此の臣民和衷と云ふ意味を廣く考へると、異宗教間の和衷と云ふ事になる。此の目的の爲に全身を献げて一致協同して行くには、啻に男子のみの力では出來ない。實に今後の我が大日本帝國は、經濟に於て精神に於て婦人の覺醒奮起を要求して居るのである。願はくば世の婦人達大いに奮勵して　陛下の御聖旨に副ひ奉り、第二維新の使命を完うするやう、今後の志を立て、今後の運動を開始する事に努めて貰ひたいと思ふ。

（「家庭週報」第二百四十六號）大正二年十一月

自動的學風を起せ

近來教育界では、其の効力と云ふ事に就いて非常に研究し、且實際に於ても種々なる方法を試みて居る。殊に亞米利加の新刊雜誌、近刊書籍などは、頻りに教育の効力問題を研究し、其の主張を公にして來て居るやうである。

我が國に於ても此の問題に就いては漸次その研究を進めて居るが、併し直樣これを實際に行うて其の効果を擧げると云ふ所謂科學的實行と云ふ點に於ては未だ見るべきものがないのである。卽ち我が教育界の相互の共同が今少しく實際の活動の上に表れ、又其の働きを起すに有力なる空氣――學風とも云ふべきものを改善せしむることが先づ必要と思ふのである。

我が教育界今日の缺點は積年の因襲による形式主義の中毒で、此の爲に殆ど感覺を失つて居ると云うても宜しい。今の教育界は平凡なる刺戟では覺る事が出來ぬ迄に痲痺して居る。斯くの如き缺點に對して大いに其の弊を改めんとして起つたものですら、尙形式主義に囚はれて根本の改善を敢行する意氣に缺けて居るものが多いので、容易に其の實行を見る事が出來ないのである。

抑、教育界の管理統一と云ふ事は之を政治界の言葉を以て云へば統御である。教育の理想的方針は共同的活動でなければならぬ。卽ち眞の合議體でなければならぬ。然るに我が國の一般の風習が專制的で、容易に自動的、協同的精神が行はれ難き情勢である。然しながら今此の風習の容易に改善し能はざる事を以て教育者自ら匙を投出して其の改善に絕望してはならぬ。大

いに積極的の態度を以て此の弊を打破し、且理想的統御の方法を講ぜねばならぬ。然らば學校の管理はどうあるべきが至當であるか、教授法の改善は如何にすべきかと云ふ事を討究して見たいと思ふ。

「如何に改善すべきか？」これは我々の十年來の研究問題である。而して今日は此の要求は教育界或一部の聲ではなく一般の要求する所で、世界の各國に於て討究せられつゝある問題である。痲痺したる教育界も比較的醒めたる部分より漸次其の積弊に氣附き、これを改善せんとする勇氣を奮ひ起して來たことは喜ばねばならぬ。實は此の勇氣が久しい間缺けて居つたのである。一度は各自が確信し、世にも公にしたことすら、尚且實行するに至らない事が澤山ある。併し今は既に其の實を擧ぐべき機會に遭遇して居るのである。物窮すれば通ずるが自然で、漸次教育界改善の機が熟して來たのである。

從來の教育界の停滯は教育制度の停滯であつた。その束縛の爲に充分なる活動が出來なかつたと云ふ事もある。今日とてもこの束縛が私立學校などの上にないではないが、併し前述し來つたやうに追々その弊を認めて之を改革せんとする氣運が向いて來たのである。例へば文部省に於ても大いに自由の範圍を擴げ、教育界に自由の活動を與へようとして居る。此の際教育界が相應じて勇氣を奮ひ起す事が出來たならば、慥に改善の實を擧げ得ることが出來るのである。

併し茲に困難なる問題が尚一つある。夫れは教育家自身又學生自身である。輿論は斯くの如くに教育の効果問題を說き、當局は斯く束縛を解いて自由の活動範圍を與へようとして居るにも關はらず、教育家自身、學生自身は依然として束縛を脫せんともせず、否積年の惰性に驅られて常に一定の型に篏められて滿足し、改善の元氣を失うて居るのである。痲痺せる事に氣附かないのである。これは教育改善の上に最も困難なる障礙である。

我が日本女子大學校では從來執り來りたる自動的教育の方針を實行すべき機關として、今回教育參考館を造らうとして目下その工事中である。又其の次ぎには更に今一つ實驗室を設けたいと計畫して居る。又現在の圖書館の書物をも增加して、眞に生徒に自由の研究をなし得る境遇を與へたいと考へて居る。

――之は曩きに本校の教育館を建設する時に於て、既に々々主張した所であつた。行く〳〵は圖書館を公開にして、大學擴張の目的を實現したい考であつた。併しこれは久しい間の主張に止まつて容易にその理想の全部を實現することが出來ずして今日に至つた。なぜならば、折角圖書館を設けても或は參考館或

は實驗室を增しても生徒自身が之を活用し、乃至教師が之を活用せしむべく指導しなければ折角の設備も全く無用の長物となるのである。

所謂一般學生の元氣が衰へて自動的研究を喜ばない。凡て教師の指導や講義に依賴して定められたる型の如く學ぶと云ふ風がある。自ら研究し自ら解決しようとする勇氣も氣風もない。所が教育家も亦生徒をして自ら活動せしむるよりも、自ら講義を與へ、試驗制度を以て生徒を統御して行く方が樂である。この積弊が永い間の惰力をなして容易に改まらなかつたのである。併しこの態度、この生活を改めなければ設備や學制は如何に改善せられても活きたる力を造るに足らないのである。故に今度設備の改善充實をなすに當つても先づ第一にこの點に就きて學生自身の反省を促す次第である。

學生をして必要なる書物を自由に讀ましめ、又參考館に就いて實物を觀察し、又實驗室に於て自ら實驗し、或は研究の爲に充分餘裕ある時間を作る樣にしたい、斯くの如くにして漸次其の改善の實を擧げて行くのである。が、之に依りて効果を擧ぐると否とはたゞ學生及び教育家其の人自身の態度如何に在るのである。外部に於ける束縛は今日は既に脱しつゝあるのである。境遇は漸次自由を與へられつゝあるのである。これを自覺し、これを主張する教育家及び學生は、先づ起つて自ら其の學風を起し、自ら實を擧げて行きたいものである。而して之を一般の教育界に押し擴めて行かなければならぬ。

（「家庭週報」第二百四十七號）大正二年十一月

大正維新

年茲に改まりて、人心茲に新たなり。諒闇既に盡き、今上登極初次の新年を迎へ、殊に今秋は御卽位の大典行はせられんとし、國を擧げて其の盛儀を仰ぎ待ちつゝ多大なる歡喜と希望に滿ちて此の新年を祝す。大正の改元は國運を新たにする一新轉機にして、何等かの變革を見るべき感想は上下を通じて一般國民の心奥に流れつゝある今日、吾人は一層深き意味を以て此の新年を迎ふるなり。

過去四十五年間我が國の進歩は洵に歷史上稀有の事迹に屬せりと雖も、之を世界文明の大勢に照らし歐米各國の進歩に比する時は、尙未だ追及し易からざるものあり。而も明治の進歩は主として物質的文明に存す。今にして人心萎靡せんか、啻に國運の進暢を阻害するのみならず、國家の前途を暗澹たらしむること決して杞人の憂にあらず、其の弊因を尋ねて之を匡正し、

其の病根を究めて之を救治するは蓋し方今の急務にして實に大正國民の任務なり。

此の意味に於て大正の新時代は、正に第二維新の時機に會せり。明治の維新が物質的に社會の面目を一新せしが如く、大正の維新は精神的に社會の面目を一新せざるべからず。政治に、經濟に、宗教に、學術に、文藝美術に改革刷新すべきもの固より限りなしと雖も、先づ其の根本たる教育の改善より其の端を開かざるべからず。而して能く世界の趨勢を察し、時代の新轉に應じ、世界的發展を遂ぐべき國民の活動力を培養せざるべからず。大正の教育は須らく世界的ならざるべからず。内に自國の國民性及び國情を省み、外世界に於ける日本の教育たる實を完うせしめざるべからず。

各個人の特性を尊び、其の創意を重んじ、各個人の心をして倦まざらしむると共に、特色ある文明を創設せんとするには、世界人文發展に寄與する所なくんば遂に其の價値を湮滅するに至らんのみ。我が國從來の教育は動々もすれば個人の特徴を無視し、其の創意創見を阻害するの傾きあり。所謂殺人教育の弊に陷り、其の結果却つて國家社會の進歩發展を停滞せしむる所鮮少に非ず、宜しく自治自修の習慣を養ひ、個性の尊重、創始力の培養を重んじ、個人の發達を遂げしめ而して國體に奉仕するの力を備へしめざるべからず。

商業工業の如き物質的事業より、教育宗教の如き精神的事業に至るまで、人間一切の活動界に於て、經濟的に又科學的に、多大なる効果を擧げんと力むるは近代の著しき趨向なり。我が國從來の教育は動々もすれば、勞多くして効少きの嘆を免れず、教育上に於ける各般の浪費を除去し以て其の効率を增進するの法を講じ、殊に學制學風の改善を計るは最も今日の急務なり。形式偏重、受動注入の弊風を刷新し、試驗學問、特權尊重の弊風を打破し、學科及び教授時數過多の壓迫を除去し、之に代ふるに大いに自己教育の美風を振作し、盛んに研究心の啓發を促進し、學理上若しくは實際上の難問題を解決し得る實力を充實し、終生進歩して止まざる向上的態度を養成せざる可からず。

物質主義、功利主義、個人主義の桎梏を離脱し、人格主義、精神的生命主義、新生涯を憧憬欣求するところの信念を養成せざるべからず。我が國明治維新以來一方には西洋の物質的文明に眩惑し、科學萬能の信仰に囚はれ、實利主義に迷溺したると同時に、他方には、古來の一切の信仰を放棄したるのみならず、之に替るべき新しき精神安立の地を得ず、遂に今日の如き精神生活の動搖頽廢を生ずるに至れり。教育は人格と人格との

相觸るゝ所、靈と靈との相接する所、感化の行はるゝものたらざるべからず。蓋し人格の根本動力たる信念の涵養に力むるは、一切教育の根柢たらずんばあらず。

近時教育改善の聲漸く社會に高まり、時機方さに熟れ來れるものゝ如しと雖も、猶因襲形式に拘泥して姑息偏倚の見多し。多年の情勢を一轉せんこと固より容易にあらず。而も内外の形勢は第二維新を要促して一日も空しくすること能はず、百年の大計を確立するの時機は、今日を措いて亦他日を期すべからず。此の機一たび去らんか、我が國運の將來を如何せん。

大正の新時代は先づ教育の改善振興を策して第二維新を完成せざるべからず。大正初次の新年に於て、國民が覺醒して時代の休徵を察し、決然斷行の緒に就き、百年の計畫を確立せん事を希ふものなり。

（「家庭週報」第二百五十三號）大正三年一月

新年所感

昔から問題となつて居て、今日に至るも猶解決の出來ない根本問題が二つある。その一は、人の性は善か、惡か、或は善惡混淆かと云ふこの三つの事である。又一方は宇宙の本體論で、天道は是か、非か、或は是非を離れたる器械的なるものかと云ふ事である。私は今この問題の總てに解釋を試みようとするのではない。唯大正三年を迎へ、新たに今年の計畫を如何にして成就せしめんかを考慮するに當り、先づ天道は果して生命あるものか、吾々人間に要求目的あると同じく宇宙も亦目的を有して活動するものであるか、善意志、善目的を持つものであるか、或は物質的機械的のものであるかを考へ、これを實世界に應用して、大正三年と云ふ實に我が國家に對して重大なるこの年を卜したいと思ふのである。

此の問題に就いては哲學者、宗教家が種々の考を持つて居るが、兎も角人生は善を要求して居るものであると云ふことは動かぬ説である。宇宙は機械的物質のみならず、根柢に人間の要求を滿たし、人間の願ひを助けて行く所の精神的なる本體がある。只此の社會には惡と云ふものゝ有る事、人生には災、不幸のある事は免れない。併し此の不幸が在るから幸ひがあり、惡があるから善の差別があるのである。天道に非があるから是があり、是があるから非の差別があるとも云はれるのである。畢竟するに矢張り人間はその宇宙實體の善惡の中に在りて、その善を慕ひ、善に向はんとして、努力奮鬪して居るものである。惡を嫌つて正につかうとして居るものであるのである。而して

天は斯くの如き人々の要求を充たし、人類の歴史を宇宙の目的に向けて行く所の大統一力、大支配力を持つて居るものである。即ち天道は必ず人間を發達せしめて、天の子の如きものにならしめんとする慈悲深い母であると云ふ事は信ずるに難くないのである。

斯くの如き事を考へて、理性に、感情に、意志に訴へ、自分の内に確信を以て目的を立て、全力を注いで生活するのが吾々人間の要義である。此の生活を稱して眞に生活するといひ、又は信仰或は信念の生活といふのである。

處がこの信仰にも亦迷信と眞の信仰の區別がある。過去五十年の我が國を考へると、知識の普及に從つて、種々迷信のある事が發見され、人々が眠りから醒めて迷信を排斥せんとした。處がその極端に走つた結果として、眞の信仰も亦破られた。信仰は愚夫愚婦のする事である。信仰は我が人生に必要のない事であると云ふやうになつた傾きがある。併し何處の國を見、何處の歴史を繙いても、迷信は免れぬ事で、人間の生命ある處には信仰と共に迷信のある事は事實である。或場合には、迷信と信仰との境域が解り難くなる事がある。

人々の根柢には善に進まう、向上しようと云ふ、止む能はざる要求があり、宇宙にはその要求を充たし、その努力を助けようとする精神がある。其の天道と吾々の人生とが相合致し、相働いて一にならうとして行く事が信仰であるのである。我が日本の歴史でも東洋西洋の歴史でも、其の根柢をなして居る所のものは實に是があるのである。この信仰は人間の生活の上に缺くべからざるもの、否一時も一刻も生活より離るゝことの出來ぬものである。

私は今年の運命を開拓する努力を始めるに當つて、迷信的部分を排斥せよ、而して眞の信念を養ひ立てよ、と云ふ事を修養の土臺とせねばならぬと思ふ。消極的に云へば、吾々は大正三年を迎ふるに當つて、吾々の生活から我が日本の國民生活から迷信を排除し度い。今年は寅の歳である。寅の歳には婚禮を嫌ふものがあるが、此等も迷信から來る考である。又方角が惡いとか、日が惡いとか云ふことで騒ぐ人もあるが、これ等は皆迷信である。先頃百三十五名を乘せた愛鷹丸が遭難した事は今年の劈頭第一の悲慘事であつた。人々はこの感情に刺戟されて不吉な年の豫言であるかのやうに思ふものもあるが、これも迷信から來た感情である。災禍は年の終りにも始めにもある。年の始めに禍があつたから、今年は年中不吉であらうと云つて氣を損ずるのは迷信の極みである。吾々は斯くの如き迷信を恐るゝには及ばない。吾々が心を靜めて自分の精神をこの天地の大道

に深く入り込ませ、今日の世界の大勢、國家の有様を考へたならば、この年の吉兆を感ずる事が出來やう。迷信に捕はれて居る時には、時の機運傾向を察知する事は出來ない。菅公は

心だに誠の道にかなひなばいのらずとても神や守らん

と歌はれたが、實に吾々の意志が天道宇宙の大目的と一致して進むならば、必ず神は吾々を守るのである。無限の力は吾々と共に動くのである。又　先帝陛下は

目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ

と宣はせられたが、これは至誠の信念を云はれたもので、目に見えぬ宇宙の目的と、吾々人間の目的と相合體して行く所に何事か成らざるものはない。

大正三年と云ふ年は我が國に於て最も重大神聖なる大禮たる卽位式を行はせらるゝ年である。その喜びのしるしとして、東京に大正博覽會、教育大會が開かれ、又女子教育問題の爲めに、全國の教育家が東京に會して、重要な問題を議すると云ふことも計畫せられてゐる有樣である。實に今年は重大なる時機である。種々の問題が輻輳し、種々の活動が開始されて居る。是を以て見ると、本年は實に吉い歳に違ひないのである。吾々は此の歳の吉兆に應ずるが爲に、國家及び吾人の運命に關し、充分の確信を以て、今後の生活に向はねばならぬ事を深く信ずるのである。

（「家庭週報」第二百五十四號）大正三年一月

自治の精神を養へ

恭しく我が教育勅語を拜すると

『我が皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ立ツル事深厚ナリ

（中略）コレ我ガ國體ノ精華……』と仰せられてある。此の意味の根本は何處に存するであらうか。謹んで惟みるに其の起り其の源は我が國の宗教とも云ふべき古神道の精神『にぎみたま』と云ふ言葉に表れて居ると思ふ。にぎみたまとは調和する魂と云ふ事で、卽ち國家の主權者たる　天子と國民とが恰も一體になり、調和統一された家庭の如き國體となつた處のものをさして云ふのである。此の精神が我が帝室の根本動力となつて萬世一系の皇統が今日迄成長發達したのである。是我が國が世界各國と異る所、彼の生命財產の自由を得る爲に、又は國民の權利を獲得する爲に、血を流し劔を交へて立憲政體を建てたといふが如き事蹟を我が史上に殘さぬ所以である。斯かる國柄に於て　先帝陛下は憲法の恩典を下し給ふた。

明治廿三年我が國が立憲政體となつたと云ふ事は、國家にと

つては非常に重大なる事、我が國民にとつては未曾有の賜である。憲法政治以前の我が國家の政治を省みると、獨り　天皇が君主たるのみならず、其の下に將軍、大名ありて何れも專制政治を行ひ、而して國民の生命財産與奪の權は是等將軍、大名の自由に歸して居つたのである。且又其の以下の武士に迄斬捨て御免などいふ事が行はれて、かゝる罪惡も更に咎められなかつた。又百姓、町人、大工とそれ〴〵の内に階級が出來、制限があつて、それより他には一歩も踏み出す事も出來ない。之等の階級にある人民は恰も籠の鳥の如き有樣で、自由に自己の目的を以て成長して行くと云ふ事は出來なかつたのである。

然るに明治の御代に至つて、立憲政體が施かれ、此處に始めて人民は權利を認められ、恩典を施されたのである。同時に國民の義務、責任も重大になつたのであるが、我が國民は此の恩典に浴し、義務責任を擔へるにも拘らず、二千有餘年の隋性に支配されて立憲國民たるの自覺を動ゝもすれば忘れんとするのである。卽ち大正の初めの紀元節に當つて、玆に省みる所あつて、國民が憲法の御趣意、立憲の國體を自認する爲に、今後毎年の紀元節に於て憲法發布の際の勅語を朗讀する事と決せられたのである。

立憲政體もあれば共和政體もあるが、何れを問はず今日の立憲政體は、國民が一致共同する、男も女も、上も下も、同じ義務、同じ心を以て國家の目的を立て、社會の安寧秩序を保つを目的とするのである。然るに今日迄我が國に於て政治と云ふ事、又國家の運命を支配する責任は上にあつて下にはなかつた。上の爲す事は下之に傚ひ、之に服從するに過ぎなかつた。今日我が國家が經濟、外交、内政の困難に遭遇し、非常な奮鬪をなしつゝある時に當つても此の苦しみ困難は上政府のなすものであつて、國民殊に婦人には他事の如く思はれて居るといふ有樣である。然れども立憲政體の本義は斯かるものではない。下の國民卽ち百姓も町人も女も悉く國家の困難、財政問題、教育問題總てに與らねばならぬ義務、權利があるのである。學校にしても、教師が教へたものを生徒が只受けつぎ、服從するだけではやくに立たない。生徒各自が責任を感じて自學自修し其の校風を改善して行くものでなければならぬ。今春開かるべき大正博覽會には五十人の監視人を募集した處が、それに應ずるものが千七百人の多きに上つたと云ふ事である。之を見ても我が國に職業が乏しく、活動の道が塞がれて居るといふ事を證明する事が出來る。爲に人民は日夜足掻いて居る。其の結果制度を破壞せんとして居る。今は非常に危險な時に遭遇して居る。此の有樣を誰が救ふ事が出來るか。此の惡習慣を誰が改善する

か。政府がするか官吏がするか、否々之は一に吾々下の人民の手にあるのである。何處の歴史を見ても、新しい生命を生み出す處のものは婦人、百姓、町人、學生等無位無官の人にあるのである。斯かる人々が覺醒して眞に國家の改善を計らねばならぬ。卽ち吾々はリソースフルな國民にならねばならぬ。リソースフルは財源である。自己自らが往くべき道を開拓して進まねばならぬ。自ら治め自ら活動して自己の運命を造り、其の財源を生み出さねばならぬ。

世界の財源は地下にあるものが多い。食物、衣服、材木、鐵、石炭皆地から出來る處のものである。然るに我が日本は各國に比較して夫等の財源に乏しい。鐵、石炭の如き重要なる財源も歐米等に比較すると極く僅なものである。少しく他に勝つて居るものは米、生糸であるが、其の他は小麥でもポテトでも殆ど比較にならないのである。天然に惠まれた財源は決して豊富とは云ふことが出來ないのである。されば今後の我が日本は何處に財源を求めてよいかといふことは、吾々が夢寐の間にも忘るゝことが出來ぬ問題である。

既に自然の財源に乏しいとなれば、我々國民は將來の發展を是非とも自己の能力精神の中に求むる外に道がないのではあるまいか。卽ち國民の能力を豊富ならしめて國家の進歩の財源とせねばならぬのである。自然の財源が地下にある如く、國民各個人の頭の中に財源を求めねばならぬ。青年學生殊に女子の頭が發達し、女子が種々發明工夫して自ら人格を進め、女子教育を完うして强健にして進歩せる次代の國民を作らねばならぬ。そして活動の根本であり、進歩の源であるところの自ら治むる精神が、國民殊に青年の頭の中に植ゑ付けられて成長しなければならぬのである。本日憲法發布の勅語を奉讀する事になつたのは、今後の教育に於て此の精神の涵養が國民の能力を進めて、國家發展の財源を豊富ならしむる所以であることを認められたからであると信ずるのである。

（「家庭週報」第二百五十九號・紀元節祝賀式に於て）

大正三年二月